

---

# それすらもただ平穏なる日々

羽沢 将吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それすらもただ平穏なる日々

### 【Zコード】

N7165C

### 【作者名】

羽沢 将吾

### 【あらすじ】

一人暮らしの高校生、ショウ。男一匹、逆境に負けずに頑張ります！そこに絡むは幼馴染の美少女優等生、遙。凸凹な二人、青春真っ只中！

懸想文？

ジリリリリリリリ

且覺ましが鳴つている。うぜえ。

昨夜寝たのは三時半　ハイドの交代要員が休んだから俺が残業した  
為だ。

新聞配達が休みだったのが救いたせ

「ふうわあああああああ…」

大あくびをしながら体を起こす。  
やべえ、頭痛えな。

「シヨウカ一覧」  
やまと一覧

一ノタノメノテ

遥のヤツか  
はるか

普通はノックしてから声掛けるモンじゃないのか？

「ハガシミウ!! 遅刻するわよ!!」

解ったので先に行こうよ

意味不明だこのバカ女。

ガチャヤ！

何い！カギ開いたあ！？

「何よこれー汚つたないなあ！先月掃除したばかりなのにー！」

「何でお前が俺の部屋の合鍵持つてんだ!?」

「先月掃除したげた時に作ったのっ！」

「おい、それ犯罪だぞお前

「良いから！早く顔洗つてこれ食べなさいよね！」

可愛いハンカチに、大きなおこぎりが三つ。

「…サンキュー」

「早くしなさいよ！」

「つて、よく見たらまだ六時半じゃんか！」

そういうや田覚まし鳴つて直ぐ起きたんだからまだ時間的には余裕の筈だぞおい！」

「あたしが部活に間に合わないじゃない！」

遙は弓道部だ。ロイツの袴姿は忌々しげが素敵に凛々しい。  
くつきりした田鼻立ちにサラッとしたロングヘア、均整の取れたプロポーション。

テストでは学年十位から外れた事無く、先生方からの覚えも田出度い。  
男女問わざ学校中から注目の的で、特に下級生女子からの人気が高い。

まあ俗に言つ完全無欠の美少女つてやつだ。

俺に対しても以外は、な。

「ほらー…さつさと漕ぐー！」

俺の自転車の後ろできやあきやあ騒ぐ遙。  
正直、鬱陶しい事この上ない。

俺達の通うとある地方都市の高校は約一十キロほど離れている。  
普通の生徒は近場の駅から電車に乗るのだが、俺は節約の為に自転車で通っている。

またまた寝坊したときなんかは原付で学校の近くまで行く事もあるけどな。

しかし先月、珍しくとも無い風邪ひき込んで一週間学校休んで以来、

幼馴染の遙が毎朝起こしに来るようになつちまつた。

遙の家と俺の家は元々お袋同士が親友で、親父達も仲良くなり、俺達の住んでいた家の近くに持ち家を建てた遙達が引っ越してきた。兄妹の様に幼い頃から遊んでた俺達も今は高校生。早いもんだ。昨年の夏、悪友連とツーリングに出る俺を残して長野へ旅行に行つた俺以外の家族が

居眠り運転のトラックに突つ込まれて全滅しちまつた事だけが変化点か。

住んでた家は借家だつたから、俺一人じゃ勿体無いんで六畳と四畳半に

バストイレキッキンの現在の部屋に越した。いま

六畳は前の家からの荷物で一杯になつてゐる、が。

ようやく学校の近くの駅前だ。遙はここで降りて、彼氏の到着を待つ。

アホ臭いつたりやありやしねえ。

「ねえ、今夜ご飯食べに来れるの？」

「いや、今夜はガススタのバイトが有るから。

おばさんによろしく言つといってくれ」

「ちゃんと何か食べなさいよ！」

俺はようやく静かになつた事にほつとして学校へ向かう。

……まだHホームルームRまで一時間有るよ。

とりあえず教室で寝るか。

自転車を停めて校舎へ入る。

「よう、早いな」

野球部の深見ふかみが声掛けてくる。

「おう、おはよ。朝練か？」

「ああ、お前は帰宅部なのに早いないつも」

「ムダだよな我ながら」

思わず苦笑する俺。

「お前もなんかやれば良いの。つっても、一年の夏からじゃな

「ま、俺は食い扶持稼ぐのに精一杯さ」

「……そうだな、頑張れよ」「ああ。サンキュー」

いいヤツだよな、アイツ。

ガラと戸を開けて教室に入る。

「うーす」「おはよー」

声を掛けてくるヤツらに適当に返しながら窓際一番裏手の俺の席に着く。

と、和泉がなんか声掛けてきた。

「ねえ、ショウくんつてさあ、本当に遙と付き合つてないの?」「またそれかよ。

「俺は完全無欠にフリーだし、遙は彼氏居るじやんか」

「でも、なんかいつも一緒だしね」

「だーかーらー、俺のお袋とアイツのお袋が親友だったヨシミで俺が世話になつてんの」

「ふーん、そなんなんだ」

「ああ、そなんです」

ととと、と去つて行く和泉。

多分アイツは遙の彼氏の二年B組剣道部主将の芳野さんにて思いつてんだろうな。

んで、俺と遙がいつも一緒に居るのをネタにしてなんとかしようと考へてるんじゃないのか?

しかし今時貴重なあの和風カップルの牙城を崩すのは大変だぞ和泉よ。

つて、なんか俺の思考回路が汚れて來てる気がするわ…  
とりあえず寝るか。

。

「うなが、もう届か。

授業は何受けたっけな?ま、気にしない気にしない。

さて、パン買いに行くべ。

「ショウ!届く?」

ん?誰かと思えば遥だよ。

「ほりこれ。」

お、弁当。

「なあ遙、おばさんに悪いから良こつて言つとこでくれよ」

「なに遠慮してんのよ。それにそれはあたしのだからねー!」

「あ、そりや失礼。つて、お前はビデオすんだよ?」

「私は芳野先輩と学食で食べるの」

「じゃあ、金払うよ」

「バカねえ。それじゃ節約の意味ないでしょ。良いから食べなさい

よ」

「ああ、じゃあありがたく頂くわ。サンキュー」

つて、もう届ねえや。

つと放課後か。バイトは七時からだから帰つてさよると休めるな。  
とつとと帰るかな。

下駄箱から靴出して、と。

ん?なんだ?なんか落ちてきたぞ。

つてなんだこの手紙は?

「なになに、愛しのショウ様へ、つて、ラガレタージヤんこれ!...」

「をいつ!なんで遙がここに届て俺の下駄箱からヒツヒツと落ちた手  
紙を

俺より先に拾つてタイトル音読してんだよつ!?

「誰に状況説明してんのよ。つて、マジこれー?早く開けなきよ  
バカショウ!...」

「だあつ!...なんでお前の前で読まなにやならんのだー!とつとと部

活行け！

「なによ～照れちゃつて～。ショウに惚れるなんてドンの物好きか  
しりあ？」

「あ、芳野先輩」

「えー、ビービーー？」

ダッシュ！

「ねえビービー二年は今日進路相談つて、バカショウ逃げたわねえつ  
！！！」

遙の喚き声が遠くなる。俺は自転車置き場まで辿り着いてから封を開けた。

「愛しのショウ様へ

こきなりこんな手紙を出してしまんなさい。

私は一年A組の西村 亜里沙と申します……」

西村亜里沙、か……ん～、誰だっしょ？

俺の記憶には無いなあ……？しかし、これまた古風なラヴレターだね。

明日の放課後、美術部室でお待ちしてます、ねえ？

……誰かの仕込みか？

それとも生意気な俺を二年がくる積りか？

いや、もうこの時期にそれは無いな。内申が気になるシーズンだからな。

悩んでも仕方ないな、何はどうあれ明日の放課後、現場で判断だ。

## 逆切れ？

とつあえず家に帰ると、アパートの前で遙のお母さんに出会った。現在三十九歳で三人の子持ちだが、綺麗だとしても若く見え、まだ二十台と言つても誰も疑わないだろう。

「ショウくん、お帰り」

「あ、おばさん、ただいま。どうしたの？」

「ショウくん、今日ご飯食べに来れないんでしょう？」

お弁当作つて来たから、バイトは食べてから行きなさい」

「・・・いつも、ありがとうございます。」

遙から電話でも有つたの？」

「ええ、ショウくんに何か食べさせて、つてね。

でも、ホントにショウくん最近瘦せてきてるわよ」

「大丈夫だよ、おばさん。俺ちょっと太つてたからちょっと良いくよ」

「無理しちゃダメよ。明日は食べに来れるの？」

「うん、お邪魔するね」

「そうーじゃあショウくんの好きな唐揚げにするわね」

部屋に入り、弁当を開ける。

肉じゃがとショウマイに、ご飯が山盛つだ。

「いただきます！」

バツと頭を下げ、ガツガツと食べる。

おばさん、遙、ありがとな。

バイトが終つたのは10時過ぎ、流石に疲れたぜ。

やべ、明日の課題やつてねえ。だけど今からやる元気は出ないなあ。

朝早く起きて、新聞配達の前にやろうかな？

やれやれと憂鬱な気分になりながらアパートに戻ると、

俺の部屋に電気が点いてる。ありや、消し忘れたつけ？

「おかえり、ショウ」

「ショウ兄ちゃんお帰りなーい！」

「遙！それにカナサリも一緒に！」

不審に思いながら力ギを開けて部屋に入ると、三人の女の子に出迎えられた。

香奈と沙里は遙の妹で双子。現在小学五年生。子供らしくキャピキャピしている香奈と物静かで大人びている沙里は、

美形一家の血をしっかりと引き、一人ともとても可愛らしい。飛びついてくる香奈を抱き止め、靴を脱ぎ部屋に入ると、

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

沙里もにっこりと愛らしく微笑みながら声を掛けて来た。

「ああ、ただいま。

遙、どうかしたのか？」

「ん、アンタまだ選択歴史の課題やってないでしょ？」

疲れてるだろうから今日はサービスで私の見せて上げる

「うお！そりゃ助かる！神様仏様遙様……！」

「た・だ・し！条件がひとつ！」

…嫌な予感がする…

「アンタが今日貰ったラヴレター、見せなさいよ」

…予感、的中…

「断る」

「なんですよー良いじゃない減るもんじゃなしつ……」

このバカ女め。

「お前な。何故ダメかは考えりや解るだろ？」

「ハア？ そんな自分勝手な理屈が解る訳無いじゃないの！」

「じゃあ、お前が芳野先輩から貰ったラヴレター、俺に見せてみろよ

「ななな何言ってのよバカじゃないのアンター見せる訳無いじゃない  
いつ！…」

……もう返す気力も出て来ねえよ。

「ねえねえ、ハル姉の負けだよ？」

沙里が呆れた顔で言い放つ。

「沙里は黙つてなさいっ！…！」

「んとね、ハル姉がわがままだとおもひの」

香奈も突っ込む。

「……！」

顔を真っ赤にして絶句している遙。馬鹿め、妹に諭されやがって。  
「ハル姉はショウお兄ちゃんの事が好きなんじゃないの？」  
いきなりの沙里の言葉に遙がスッテーンと後ろにひっくり返る。  
本当にひっくり返るんだよなコイツ。

このリアクション大魔王め。

「沙里っ！冗談も休み休み言いなさいよっ！」

でかい声出すなよ、もう十一時過ぎてんだから。

「じょうだん。ふう。じょうだん。はあ」

香奈が妙な事を呟きだす。

「…何やってんのよ香奈」

「じょうだんを休み休み言つてるの」

「……もう帰るっ！！バカショウ死んじゃえっ！…」

俺かよ。

「おやすみなさいお兄ちゃん」

「また遊んでね～ショウ兄ちゃん！」

飛び出していつた遙を追つてツインズも帰つた。

なんか、アホみたいに疲れたな。

ん？遙のヤツ、課題のノート置いてきやがつた。  
多分、ワザとだな、遙のヤツ。ありがとよ。

翌朝はなぜか遙の襲撃が無く、俺は普通に通学出来た。  
教室にカバンを置き、遙のクラスである一年A組へ向かう。  
俺がドアを開けると、遙と人気を一分するミス我が校の南 亜由美  
が立つていた。

「あら、ショウ君。久し振りね！」

おつとりお嬢様系の彼女も全校生徒の憧れの的だ。

運動系ヒロイン代表が遙、文科系ヒロイン代表が南と、一年A組の  
ラインナップは全校一だ。

「おはよう、南？ところで遙来てるか？」

「遙ちゃんならまだ来てないわ。まだ部活終つてないんじゃないのか  
かしら？」

その時、南の後ろから甘いマスクの長身野郎が現れた。

出たな、ホスト竹村。コイツは『道部の現副主将で、次期主将だ。  
性格もまあまあ、ルックスは抜群なので当然良くモテる。

「やあ、ショウ。遙ちゃんなら今日は来てないぞ？」

なんでも、風邪引いたつてお母さんから電話有つたつて

「え？マジか？解つた、ありがと」

「あら、もう行くの？つて、そろそろH.Rか。またねショウくん！」

南の声を聞き流しながら俺は教室に戻つた。  
どうしたかな、遙のヤツ。帰つたら見舞いに行くかな。

よつしや放課後！さつさと帰るかな。

「ちょっと、ショウくん！もう帰るの？」

振り向くと、腕組した和泉が俺を睨んでいる。  
つと一 手紙ハガキの事忘れてた！

「いや、ちょっと用事があるからもう少し居るが。お前は何か俺に

用かい？」

「あ、そう、なら良いわ。なんでもないから」

「なんだそりや？」

「じゃあね～！～！」

なんなんだアイツは？

さて、美術室、ね。

でも、もしかして美術部が活動してんじゃないのか？

トコトコと歩いて美術室に辿り着く俺。

さて、こういう時はノックしたほうが良いのか？  
まあ一応やつとくか。

「ンンンン。

「は、はいーぞ、どうぞ」

可愛い声で中から返事が来た。

わて、ドアには黒板消しは挟まつてないな。水の入ったバケツも仕掛けになさそうだ。

「失礼します」

俺は美術室のドアをそつと開けた。

## 告白？

そこには、ちょっと驚くほど美少女が立っていた。  
長い黒髪をツインテールにまとめ、小さな顔にはぱっちりお皿目と  
おちょぼ口。

つんと尖った鼻に細い首。ほっそりとしたおやかな体。細くて白  
い足。

うん、遙＆南のミス我が校・正統後継者の資格バツチリだ。

「あ、あの、先輩、こんなトコに呼び出しちゃって『めんなさい』」

可愛らしい声を振るわせて話し出す彼女。

この状況、普通の健康な男子高校生ならば躍り上がって喜ぶだろう。  
しかし、各種バイトで世間の荒波に揉まれている俺には何かの間違  
いにしか思えねえ。

そうだ！まだ彼女は名乗っていない。つまり、彼女が西村何某とは  
限らないんだよな。

彼女はきっと西村以下略に頼まれて、俺をおびき出す工サだ。

ふふふ、騙されないぞ。ふひひ！

「あ、あの、先輩大丈夫ですか？」

「え？」

「なにか、奇妙な笑い方してましたけど……」

やべえ、声に出たのか。

「『』めん、大丈夫。で、キミの名前は？」

「……え？あの、私、西村亜里沙、ですけど……」

「……あれ？」

「え……？」

予測つてのはいつでも裏切られる為にあるのか。

「え、と、昨日俺にラヴレターくれた、西村さん？」  
ボン！と赤くなる彼女。

「・・・はい、そうです・・・」

と、言う事は、何かの仕込だ。ドッキリカメラだ。古いな俺も。  
どこかに誰かが隠れてないか？

キヨロキヨロと辺りを見廻す俺。

そんな俺を見てオロオロとする西村。

なんだこのあからさまに異様な雰囲気・・・。

・・・とつあえず敵の出方を見てみるか。

「え、と。つまり西村さんは俺を好きになってくれた、と？」

「は、はい・・・。四月に入学して直ぐに先輩に優しくしてもらつてから、ずっと気になつてました・・・」

・・・そんな事有つたかな・・・？

これだけの美少女なら覚えてると思うんだけどな・・・  
あ！

「もしかして、自転車がパンクしてた子か！」

「はい！そうです！帰りにパンクしてて、まだ誰も友達居なかつた  
から途方に暮れてたら

先輩がどうした、って声掛けてくれて、すぐに直してくれました・

・・・

おー。あつたあつたそんな事。

だけど、こんな美少女だったか・・・？

「あの頃、まだ私メガネしてたし、髪もお下げだつたし・・・」

そう言えばあの純朴田舎娘の面影があるわ。変われば変わるもんだ  
ねえ。

・・・女つて怖えな・・・

「それで！先輩の事をだんだん好きになつたんだけど、先輩には仲の良い人が居たので・・・」  
遙、か。

「だけど、その人には彼氏が居て、校内N○1カップルだって聞いて、おかしいな、って・・・」

ふむふむ。

「だから、部の先輩に確認してもらえる様に頼んだんです。先輩とあの人気が本当に付き合つてないかどうか」

「そうか！和泉は美術部だったな！オーケー、理解した。

俺の思考回路が汚れまくつていただけか。すまん、和泉！

「先輩、何を拌んでいるんですか・・・？」

あ。また出てた。なんか最近どうもセルフコントロールが上手くいかんな。

「ああ、ごめんなんでもない」

「えと、それで、先輩は若富さんと付き合つてないんですね・・・」

？

若富 遥。ヤツのフルネームだ。若富って言われても一瞬誰か解らなかつたぜ。

「ああ。遙は幼馴染だけど付き合つたことは一度もないし今も違う。ま、兄妹みたいなもんだな」

西村が目を輝かせる。可愛いな、この娘。

「じゃあ、先輩は今お付き合いしてる人とか居ないんですか？」

ちょっと上目遣いになり、俺を見ながら聞いてくる。

「ああ、居ない。完全無欠のフリーマンだね」

「じゃあ！あの、その・・・私とーお付き合いしていただけませんか！？」

意を決したように告白する西村。

よつしやーー！きたーー！俺にも春が！……でも、な。

「……返事、明日で良いかな？」

ガタン！

・・・なんか、どつかからか誰かがずっとこけた様な音がしたが・・・  
？

「は、はい！明日、ここでまた待つてます」

「うん、ごめんな。俺、キミみたいに可愛い娘に告つてもううるなんて初めてだから、

ちょっと混乱してるんだ。明日、必ず返事するから」

「はい、待つてます・・・」

胸の前で手を組み、潤んだ瞳で俺を見る西村。うあ。今すぐ抱き締めてみてえ。

「じゃあ、また明日な

「はい、さよなら先輩」

廊下に出て歩き出す。

・・・なんで、その場でオッケー出さなかつたんだろう俺・・・？

西村亜里沙。

顔、可愛い。性格、良さそう。髪、綺麗な黒髪だしツインテールは萌える。

胸、不明。でもペッタンコじゃなれり。プロポーション、不明。でもすらりとしてたな。

総合評価、十段階中、九以上。文句無し！

・・・でもな、今の俺の状況を考えると、楽しい青春なんて無理だろ・・・

うつむと唸りながら下駄箱に来ると、和泉とその他数人の女子が腕

を組んで「王立ちしていた。

「シラウくん、ちょっと顔貸して」

「な、なんだよ、どうした？」

「いいから！」ひび来て！」「

そのまま体育館裏に引っ張つて行かれる。

なんだなんだ、なんで俺がこんな目に？

「どー言う事！？」

和泉が詰め寄る。

「何が？」

「何がじゃないわよ！亞里沙の事よ！」

ああ、やっぱ隠れて聞いてたんだなお前ら。

「ううよ。だつてあの子放つとけないんだもん！」

なんで女ってのはこうなんだ・・・

「遙とも付き合つてないし、他に彼女も居ない。なのになんでもんな可愛くて良い子から

告られて考えさせてくれ、になるわけ？意味解らない！！

・・・そひ、遙<sup>アイツ</sup>なんで学校休んだんだよ・・・？見舞いに行かなきやな。

「ねえ、なんで！？答えなさいよ！――」

・・・仕方無えな。

「・・・ああ、俺は一年前に家族亡くしちゃう？」

それで自分の食い扶持と進学費用稼ぐのにバイト三昧なのも知つてるよな？」

「う、うん・・・」

「毎朝の新聞配達、一日置きと口曜のガススタ、土曜夜のコンビニ・

・・

西村みたいに可愛い彼女が出来たら、デートしたいじゃない。  
可愛い彼女には奢つて上げたいじゃない。でも、俺にはそんな時

間も金も無い「

「・・・」俯く女共。

「それに、西村だってあの可憐さだ。狙つてるヤツだって多いって聞ぐぜ」

これは「デマカセだがあながち嘘にはなるまい。

「一緒に居る時間もそつそつ作れない俺の事なんか、直ぐイヤになるわ。

そして俺は振られる・・・だけどその頃には俺が西村に夢中になつてて、

振られた事でもの凄えダメージを受けてバイトも学校もイヤになつて引きこもる・・・

そんな未来予想図が俺の中に展開されたのか、わっせ」

「・・・」

「だから、今夜一晩考えてみて、それでもなんとか出来そうと思つたらオーケーするぞ。そういう訳だ」

「・・・ごめんなさい。私達が軽率だったわ・・・」

「いいわ、気にすんなよ。西村には内緒だぜ。じゃあ、帰つて良いか?」

「うん、さよなら・・・」

しゅんとなつた女共を後にして、俺は学校を出た。

さつきの言葉に嘘は無い。が、それだけか?

西村に告白されながら考えていた事。

それは、真つ赤になつて怒つていた、昨夜の遙の事だつた。

なんだか、自分でも意味不明だわまつたく。

## 混乱？

電車を禮歩くり、どうあえず自分の部屋に帰る。

荷物を置き遙の家へ急ぐ

途中でコンビニに寄つて遙の好きなガガ君ソーダを十個買い込む。

俺の部屋から遠の家までは徒歩三分  
あたらしい一間は返り着く

ピンポン！

「はー、どちら様？」

「あ、シヨウです。」んにちは

ヨニマ、ミマド間サニワナリド

「ショウ兄ちゃん、いらっしゃーい！」 「こん」

とんど飛ひ一直到奈良祭を終止め 沙里の頭を撫せね

卷之三

「おかえりなさい! 早かつたのね。」

「お食は六時頃で食いたい」と

「今木先生ひどいわ。」

わーアイスだー！と大騒ぎする香奈にコンビニ袋を渡す。

「あら、ありがとうね。そんな気を使わなくてもいいのに……。」

なんだか意味有りげな微笑を浮べるおばさん。

— 昨夜シミウくんの部屋から帰ってきてからなんか不貞腐れてるみ

あ、ショウくん、ラヴレター貰つたんですね！？」

「ぶつー！」

「な、なんで知ってるのー?」

「えへへへ、喋っちゃった!」

香奈か！

「香奈は口軽いんだから…」

沙里がほそつと非難する。

「良いのよ～ショウくん。やつぱ青春しないとね

ワインクするおばさん。色っぽいな…。

「遙の頭痛もその辺に原因があるかもよ?」

どうこいつ意味でしょー?」

「とりあえず、見舞つてやつて。遙は部屋に居るわ

「うん、じゃあ行つて来るね」

「あたしも～」

「香奈はいいのー沙里、香奈抑えて」「はこママ

武士の情けーーと騒ぐ香奈を殿中でじれる、と言つながら抑える沙里。

時代劇好きのお父さんの影響受けてんな…

階段を上り、「ハルカ在室中 ノックしなさいよねー」と札の掛かったドアをノックする。

返事が無い。寝てるのか?

「遙、俺だ。寝てるのか?」

ドタドタドスン！ガタンゴトンーー

な、なんだ…なんの騒ぎだ…？

ガチャ

「何よ…」

うわ、ホントにぶすくれてるな。

「おう、大丈夫か?頭痛するんだって?ほら、これ」

「きやー！ガ ガ 君ー！ー！」

ホントに頭痛してんのか?

「…まあ、入りなさいよ

「ああ、お邪魔」

遙の部屋に入ると、ソーダの様な甘い香りがする。

結構女の子らしい、水色とピンクのファンシーな部屋だ。

「ん」

クッショוןを渡されたので敷いて座る。

「あ、これサンキューな。助かった」

昨日、俺の部屋に忘れて行つた課題のノートを返す。

「ん」

ノートを受け取り、机に放る遙。

「で、具合はどうなんだ？」

「…もう大丈夫」「そうか」

話が続かねえ…

遙はクッショൺの上にペタンと座り、

クマのヌイグルミを抱き締めながらアイスを食つている。  
時々俺をチラッと見るが、目が合いつぶいつぶと逸らす。  
仕方ねえな。

「今日の放課後、例のラヴレターの主と会つてきたぜ」  
バツと俺に目を向ける遙。

「一年の西村亜里沙つていう可愛い子だつたよ。知つてるか？」

「…知つてる。美術部の和泉の後輩でしょ？ ツインテールの可愛いらしい子」

「詳しいな。で、俺はまさかあんな可愛い子が俺にラブ。してるなんて信じられなくてな…」

「ラブ。って言つた。で？」

俺は西村との顛末を面白おかしく遙に話した。

誰かの罷だと思つて拳銃不審になつた事、和泉とその一味が隠れ聞きしてた事…

遙は大笑いして聞いていたが、

「それで、返事はどうするの？」と聞いてきた。

「正直、悩んでる。和泉たちに話した事も嘘じやないしな、それに

…」

「それに？」

「…気になるヤツも居るしな」

「へえ～、アンタみたいな朴念仁でもラブ。してる子が居るのぉ？」「ラブ。って言うな。それに、まだラブ。かどうかハツキリしないしな」

「ふうん。ねえ、誰よそれ。あたしの知ってる娘？」

「それは秘密だ」「何よーケチー！！！」

口をアヒルの様に尖らせる遙。この顔、俺のお気に入りなんだよな…

「…ねえショウ、もしかして亜由美じやないの？」

「南か？なんでそう思つ？」

「亜由美綺麗だし性格良いし、お嬢様だし、あの子も結構アンタの事気に入つてるみたいだし」

「マジか！？なんでそんな事お前が知つてるんだ？」

「亜由美が私に良く聞いてくるのよ。ショウくん元気？とか、シヨウくんに『飯作つて上げたら喜ぶかな？とか』

「ああ、それはアレだ。南とも小学生からの長い付き合いだからな。きつと家族亡くした俺の事を可哀想だと思つてくれてるんだろ」「ハア、と呆れた様に溜息をつく遙。

「…まあそれも有るでしょうけど、あの子、昔アンタの事好きだつたのよ？」

「…初耳だな、おい。いつ頃だ？」

「小学五年から中一位に掛けてかな。

でもあの頃つて妙に男子と女子の雰囲気が悪かつたじやない

「あーあー、なんか男女差別だなんだつて騒いでた頃だな。でもあれ一部の男子と女子だろ？俺は関係無かつたけどな」

「男子はそれぞれだつたけど、女子は結構みんなで騒いでたのよ。女つてそういう所イヤらしいじやない。

私みたいに元気な子はアンタとかと遊んでても平氣だつたけど、

亜由美みたいなおつとり系はそんな事したら苛められかねなかつたからね

「なるほどな…って事は、俺からアクション起<sup>レ</sup>せば南が落ちるかもしけないって事か

「…っ！バッカじやないのアンタ！何そのH口思考回路つ…！可愛けりや誰でもいいってワケえ！？」

「いや、言つてみただけだ。そんな積りは全く無いがな…紛らわしい事言わないでよバカ！」

ふいっと横を向く遙。

ジトつとした横目で俺を睨みつつ、

「で、亜里沙ちゃんの事はどうするの？」

と聞いて来た。

「ん~どうすつかな。お前はどうしたら良い」と思つ~。

「そんな事なんであたしに聞くのよ…」

妙な雰囲気の中、ガンを飛ばし合つ俺達。

## ピンポーン

コンコン。

遙の部屋のドアがノックされる。

「はい？」遙の返事に応えておばさんとの声がした。

「ハルちゃん？芳野くんが見えたけど…」

「え…博隆が…？」

芳野博隆。当校三年C組、剣道部現主将にして遙の彼氏。

頭脳明晰容姿端麗性格抜群家柄良好学業優秀熱血御礼。まさに少年マンガの主人公が抜けってきたような色男ナイスガイだ。

女子からの人気はもちろん、男子からも人気が高く不良連中も一目

置いている。

受験は国立一本で既に当確出している、つと。解説終り。  
やつぱこの件は不公平だぜ。

「行つて来いよ。その間に俺はカナサリの部屋に退避しつく  
「…ん、ごめんね。でも大丈夫、部屋には上げないから」  
なんで謝るんだよ。

「ママ、ちょっと着替えてから行くつて言つていて」  
「解つたわ。リビングに上がつてもらつておくから。  
シヨウくん、芳野くんがウチ来るの初めてだからね  
…なんでそんな事を俺に言つんですかおばさん。  
「じゃあ、ちょっと行って来る。マンガでも読んでて」  
「ああ」

遙はそつと着替えを持つてカナサリの部屋へ向かつた。

## 忘却？

遙が階段を降りていく音が聞え、階下から談笑の声が聞こえ出す。なんとなく寂しい気持ちになりながら、本棚からパタリ 引っ張り出そうと手を伸ばした時、本棚の間に何かが挟まっているのを見付けた。

良くな見ると、それは手紙の束。何気なく引っ張り出してみる。

「若富 遥様」と宛名書きされているその封筒を裏返すと、「博隆より愛を込めて」

と書かれていて思わず吹き出す。

芳野先輩からのラヴレターかよ……

まあ、俺が西村から貰ったラヴレターの宛名の

「愛しのショウウ様へ」

つてのもアレだが、女の子が書いたと思えばまだ可愛いモンだ。

つと、こんな事してちやマズイよな。

元のところに戻して、と……

ピンポーン！

また誰か来たのか？千客万来だな今日は……

「ただいま～」

「あら、お帰りなさいあなた。」

「お帰りパパー！」

おっと、おじさんが帰ってきたのか。

「あ、お邪魔してます。始めまして！」

芳野先輩の爽やかな挨拶が聞える。

時間は午後六時、そろそろメシだよな……

現在時刻、午後七時。

階下からは楽しげな談笑の声が絶えない。  
どうやら芳野先輩も食事していく様だな。ってか、もう食べてるようだ。

「おかわりいかが?」

…おばさん、ちょっと残酷だよそれ…

どうも俺はつかりすつかり忘れられてる様だな…

ガチャ

「お兄ちゃん、大丈夫?」

「…沙里、か」

「ごめんなさい、ママもハル姉も忘れっぽいから、  
お兄ちゃんの事忘れてるみたい…」

あ、やっぱり。

「そつか、じやあ俺帰るわ。今、監視ビングに歸るんだよな?」

「うん…」

「オッケー、じやあ気付かれ無い様に出られんな。内緒だぜ、沙里  
「でも!お兄ちゃんが可哀想…」

両目に涙を溜めている沙里。

俺は沙里を抱っこして涙をハンカチで拭いてやる。  
「良いんだよ、沙里。俺はキミのママにも遙にも二つもお世話にな  
つてるからね。

こんな事位なんでもないから

「でも、でも…」

「優しいね、沙里は。俺はそんな沙里の事大好きだよ」

「え…」

があつと赤くなる沙里。

「じゃあ、行くよ。また今度遊びうね」

「お兄ちゃん…ちょっと待つて」

「ん?」

立ち上がった沙里は俺のほっぺにキスしてくれた。

「お兄ちゃん、沙里も大好きだよ」

「ありがとう、それじゃまたね」

俺はそっと階段を降り、靴を履くと静かに玄関を出た。  
あははは、と一際大きく笑い声が弾ける。

ま、こんなもんだろ。

俺は胸を吹き抜ける何とも言えない感覚を持余しながら部屋に帰つた。

部屋に入ると何故か涙が溢れ出す。

いや、別におばさんにも遙にも腹なんか立つていない。  
つていうか、感謝こそすれ腹を立てるなんてとんでもない。  
だけど、この自分でも解らない感情はどうしたら良いのだろう。

「久々に、走るか…」

俺はヘルメットとグローブ、そしてキーを持ち駐輪場に向かつた。  
愛車・ヤマハDT50にキーを差込み、チョークを引いてキック一発、

ポロン！と軽やかな音と共に一発で始動した。

直ぐにチョークを戻し、軽くアクセルを煽つて暖氣する。  
ヘルメットを被りグローブをして、夜の街へと走り出す。  
高校に入ると同時に学校に内緒で免許を取り、  
バイトして稼いだ五万円で近所の自転車屋から買った。  
規制前のモデルなのでらくらく90km/hは出る。

俺は何となく海が見たくなり、ギアを一段落としてアクセルを全開にした。

この胸の寂寥感とでも言つべき気持ちがスピードで振り切れれば良いと思ひながら。

「それじゃ、そろそろお暇します。ご飯ご馳走様でした！」

博隆が爽やかに挨拶し、ソファから立ち上がる。

「でも、遙さんの具合も良くなつて安心しました」「なんだ、もっとゆっくりしていけば良いのに

イイ感じに酔っ払ったパパが引き止める。

「あなた、もう九時近いんですから。」「めんね、芳野くん、これに懲りずにまた気軽に来てね」

「いえ、とんでもないです、素敵なお父さんとお母さんで羨ましいです」

「芳野お兄ちゃん、また来てね！」

「ありがとう、香奈ちゃん。また来るよ」

「…あら、沙里は？」「一階に居るみたい」

私は博隆を外まで見送る為に玄関を出た。

「じゃあ、遙また明日な」

「うん、ありがとね博隆」

「おやすみ、愛してるよ」

「もう、バカ…私も」

博隆のほっぺにキスをする。

「気をつけてね！」

自転車に跨り帰つていいく博隆。

さて、家に入つて、と…

あら？沙里が降りてきたわ。

「どうしたの、沙里？怖い顔して」「

「…リビングに入つて」

「何よ？…泣いてるの？どうしたの？」

「いいから！リビングに入つて！－！」

泣きながら大声で怒鳴る沙里。

この娘がこんな声だすなんて…？

「どうしたの、沙里！何で泣いてるの？」

ママが驚いて出でくる。パパと香奈もそれに続ぐ。

「ママのバカ！ハル姉の大バカっ！…！」

沙里の剣幕に呆気に取られる私達。

「ふえつ…ショウ、ひっく、兄ちゃんの事、ひっく、忘れてたでし  
よつ…！」

「…あつ…」「いけないつ…！」

うわーん、と泣きながらパパに縋り付く沙里。  
ママと私は押し黙ってしまう…

「何だ？どうしたんだ沙里？ショウがどうしたんだって？」

沙里を抱き上げたパパは混乱している。

「ショウ！」階段を駆け上がるうとする私。

「バカ姉っ！ひっく、もう帰ったよつ…ふえーーーん…！」

ママが両手を口に当てて涙ぐんでいる。

「ショウの部屋行つて来る！」

飛び出す私。

バカバカバカバカバカバカバカ私のバカっ！！！

自分を罵倒しながら夜道を走る。

ショウのアパートに辿り着き、ドアの前に立つ。

電気が消えてる…

コンコン

返事は無い。

コンコン

「ショウ、居ないの…？」

気配も無い。駐輪場を見に行くと、ショウのロード50が無い。

今日はバイト無いよね…

どこかに走りに行つたのかな…

トボトボと歩いて家に戻ると、パパとママが玄関の前に立つていた。

「ママと沙里から話は聞いた。可哀想な事をしてしまったな…」

「ごめんなさい、遙…私が迂闊だったわ…  
しゃくり上げながらママが謝る。

「ううん、私だって同じだわ……どうぞよ。」

「沙里の話では、ショウは怒っていないそうだから

明日もう一度ご飯に呼んで、しっかり謝りな。

パパがママの背中を撫ぜながら言つ。

「孤独に耐えて頑張つてるショウくんに、なんて酷い事しちやつたの……」

ママが顔を覆つて泣き出してしまつ。私も思わず涙が溢れてくる。

沙里は泣き疲れた様で、パパの膝で寝息を立てている。

香奈は沙里の剣幕に驚いて、一階の部屋に引っ込んでしまつた。

「ううう、明日、ショウの顔見れないよ……

しばらく走り、海の見える公園に辿り着く。

高台にあるこの公園は絶好の「テートコース」だが、

まだ時間が早いので犬の散歩やランニングしている人も多い。

綺麗に港が見えるベンチに座り、コンビニで買ってきたサンドイッチを取り出す。

パッケージを開き、もじょもじょと頬張りコーラで流し込む。

ふいに流れ出す涙を拭うのも面倒で、俺は泣きながら無心にサンドイッチを食べていた。

なにやら賑やかな男女のグループが近付いてくる。

酔っ払っている様で、きやはは、と陽気な笑い声がする。

大学生だろうか？流石に泣き顔を見られるのは何なので、

急いでティッシュを取り出し涙と鼻水を拭く。

サンドイッチをもう一つ取り出し、食べ始めた時

俺の前を通り掛かったグループの一人が突然足を止めた。

「…ねえ、ショウくんじゃない？」

「え？」

聞き覚えのある声で呼ばれた俺は驚いて顔を上げる。

そこには、今日学校で見たばかりの顔が微笑んでいた。

「南：か？」

少し派手な化粧をしているが、間違いなく遙と同じA組で、俺や遙とは小学校以来の付き合いである南 亜由美だつた。

「あやはつーやつぱりー！ねえどうしたのこんな所でそんな物食べて？」

今日は遙ちゃんの家で夕飯食べるんじゃなかつた？

「ああ、ちよつと俺に用事が出来てさ…って、お前にさどつしたんだ？」

そんな派手な格好して、しかも酒飲んでないか？」

「えへへ、優等生な私がこんな事してるなんて思わなかつたでしょ？  
最近、クラブとかにハマっちゃつてね。ちよつとしたストレス解消よ」

何事かと見守っていたグループの男が声を掛けてくる。

「おい、亜由美、知り合いか？」

「えへへ～、私の彼氏なの！」

「何い！？」「え～！マジなの亜由美～！？」

「ちよ、南！」かなり慌てる俺。

「な～んて、うつそ 幼馴染よ。ね、シヨウくん

「脅かすなよ…俺、亜由美狙つてんだから」

いかにも遊び人、と言つた風情の茶髪男が安心した様に呟く。

「え～、秀雄はバスするわ私

「おいおい、亜由美そりや無えぜ！」

きやはは、と大騒ぎになる。

いかん、いつ言つ雰囲気は馴染めないな…

特に今は。

「南、それじや俺行くわ。程ほどにしどけよ  
ベンチから立ち上がり、手を上げて歩き出す俺。

「あん、待つてよ！ショウくんも遊びに行こうよ。ね？」

「いや、俺はいいよ。明日も新聞配達あるし帰つて寝るわ

ヒュ～、と口笛が聞え、茶髪男がニヤニヤしながらからかう様に言う。

「へえ～、今時新聞配達してる高校生が居るなんて驚きだ！」

よ、勤労青年頑張つてるね！そりや、早く帰つて寝るべきだ！  
カチン、と来たが相手にしても仕方無い。この手のバカは無視が一番。

「何よ！その言い方！」

…おい、南。お前が怒らなくてもいいだろ。

「ショウウくんはね、自分で頑張つて生活費や進学費用を稼いでるんだから！」

秀雄みたいにバイトもせずにお小遣い貰つて遊んでるんじゃないんだからね！」

「なんだそりや。親は金くんねーのかよ。スバルタ教育つてやつか？あ、それとも貧乏で仕送りもしてもらえねーのか！情けない親だなー…ぎやはははは…！」

「秀雄つ！！」

俺は南の肩を掴み、横にじけながら茶髪男を睨みつつ言った。

「もう一度言つてみる…」

「ダメ！ ショウくん！」

「な、なんだ、やんのかテメエ！」

「バカ！ ショウくんは空手一段なんだから…謝りなさいよ…」

「へつ！ そんなの怖かねーよ！ ケンカの場数とは違うんだよ…」

「ダメ！ 止めて！」

南は半泣きになりながら俺に抱き付いてきた。

「お願ひ、ショウくん…」こんなトコでケンカしちゃダメだよ…」

俺の首筋に唇を当てる喰く亜由美。

そういえば、昔こんな事有ったよな…

俺達がまだ男も女も無く子犬の様に転がりまわつて遊んでた頃、俺と遙が本気で殴り合いのケンカになつた時に

やつぱりこんな風に亜由美が止めたっけ…

「解つたよ、亜由美」

「ショウくん…」

俺は亜由美の手をそつと解き、振り向いて歩き出した。

「なんだよー掛かつてこねーのかよー」このヘタレ野郎…！」

茶髪が喚いているが、俺は構わず歩き続ける。

「バカ！ あんたなんか絶交だから…！」

怒鳴る亜由美の声が小さく聞える。

俺はDTに跨り、走り出した。

部屋に戻つたのは午前一時を廻つていた。

後三時間すれば新聞配達か…寝たら起きれそうに無いな。

だけど、ちょっとでも寝とかないと明日キツイな。

俺は電気を消し、布団に潜り込んだ。

なんだか、何もかもどうでも良くなつてきたな…

進学、か。別に大学に行かなれば

こんな苦労してバイトしなくても良いんだよな。

就職すれば、普通に暮らせるしな。

どうすっかな…何もかも面倒臭えや…

いつの間にか俺は深い眠りに落ちて行つた。

三時間後、なんとか起きて配達を終え部屋に戻る。

時間は午前五時半。

もう一時間くらい寝れるけど、そうすると起きれないかもしない。

とりあえず、学校行つて寝るか。そうすれば寝坊はしないだろ。

俺はカバンを持ち、自転車に乗つて朝もやの中を走り出した。

結局眠れずに朝になつちゃつた…。

ショウ、新聞配達から帰つて来てるよね。

あたしはのそのそと起き上がり、階段降りて台所に行く。  
ママがお弁当を作つていて。

「ママ、おはよう…」

「あ、おはよう…早いのね、まだ五時半よ

ふと見ると大きなお弁当箱に唐揚げをいっぱいに詰め込んでいる。

「…それ、ショウのぶん?」

「ええ、今日ショウちゃんに届けてくれる?」

「うん。あと、おにぎり作るね」

ショウの朝御飯代わりのおにぎりはあたしが作つている。

ショウは気付いてないみたいだけど。

カバンとお弁当を持ち、ショウの部屋へ向かう。

「ンンン

「シコウ、起きてる?」

返事が無い。

「シコウ、寝てるの?」

ふと見ると、もうシコウの自転車が無い。

「もう行っちゃったの……? やっぱ怒ってるの……?」

涙がポロポロと溢れてくる。

なんでこんなに哀しいんだろう。なんでこんなに胸が痛いんだろう。

私はトボトボと家に戻り、自分の自転車を出して駅に向かった。

## 交錯？

まだあまり人も居ない学校に着き、教室へ向かう。教室にはまだ誰も居ない。一番乗りは初めてだな。席に着き、大きな欠伸を一つしてから机に突つ伏して目を閉じる。あつという間に意識が遠くなつて行く。なんだか、すげえ疲れてるな…

「ショウ、起きろよ、ショウー…」

…ん？

目を覚ますと目の前に鈴木の姿。

ああ、もう授業か？

「客が来てんぞ」

俺が顔を上げると、鈴木は教室の入り口を指さして言つ。まだ寝惚けたままの頭でそちらを見ると、そこには亜由美の姿が有つた。

「サンキュー」

鈴木に礼を言つて亜由美の元へと向かつ。

「おはよ、ショウくん」

「ああ、おはよう亜由美。どうした？」

「…昨夜はごめんね。嫌な思いさせちゃつて」

「ああ、気にしてないよ。俺こそ悪かつたな、お前も気まずくなつちゃつたろ？」

「ううん、大丈夫。もう会わないから」

「…そうか。それが良いかもな」

亜由美的顔が少し赤い。どうしたんだろう？

「ね、ショウくん、今日はお弁当持つてきてるの？」

「いや、持つて来てないけど」

「じゃあ、これ食べて！私が作ったの…」

亜由美が可愛いバンダナに包まれた大きな弁当箱を差し出す。

「え？ 良いのか？」

「うん、昨日のお詫びも兼ねて。ショウくんの為に今朝一生懸命作つたんだよ」

「ありがとう。喜んで頂くよ」

「うん！ 食べ終わったら洗わなくても良いからね。放課後、私の下駄箱に入れておいて」

「ああ、解った。ありがとう」

亜由美は二コッと微笑み、

「じゃあまたね！ あ、ショウくん、昔みたいに亜由美って呼んでくれるの嬉しいよ！」

と言つてタタッと廊下を掛けて行つた。

そう言えば、昨夜の一件で昔を思い出してから亜由美、つて呼ぶようになつたな。

ふつと笑いながら振り向いた俺の目の前に、

クラスの殆どの男子が凄え怖え顔をして並んでいた。

「…な、なんだ？ どうした？」 奴らの発する負オーラにびびる俺。

「おい、お前、南亜由美どどう言つ関係だ」

「まさか付き合つてるんじゃないんだろうな？」

…なるほど、誤解したか。

「違うつて。ちょっと亜由美の困つてた事を解決してやつたから、お礼にこの弁当作つてくれただけだつて」

冷や汗搔きながらとりあえずデマカセを言つ。

「なぜ亜由美とか呼び捨てにしてるんだ…」

「亜由美と俺は小学校からの幼馴染なんだ！」

「そりや若宮の事じや無かつたのか？」

「だから！ 遙も亜由美も幼馴染なんだつて！ ！」

野郎共ハイエナは何とか納得したらしく、席に戻つていへ。

ああ、マジ怖かつた。

ショウにお弁当渡さなきゃいけないのに、朝はショウの顔を見るのが怖くて渡しに行けなかつた。

休み時間の度にお弁当を持って行つたり来たりしている。

今日の朝練は散々で、先生から休んでろつて言われちゃうし…  
いけない、こんなのがたしらしくない！

よ～し、女は度胸！

両手で自分の頬を張り、気合を入れる。

うん、昼休みになつたら速攻で行くわよーーー！

「ファイトおー！」

「何がだ？若宮…」

「え…？あつ！？」

目の前には、古文の佐々木先生がにっこりと微笑みながら立つている。

教室中が爆笑の渦に包まれた。

は、恥い…

昼休みのチャイムが鳴り、授業が終ると同時にあたしは廊下に駆け出した。

「遙ちゃん、どうしたの？」

「ちょっとね！」

不思議そうに声を掛けてくる畠田美に言い捨てて廊下を走る。

この勢いで渡しちゃおつーつこで一緒に食べながら昨日の事謝ちやお…

ショウのクラスに辿り着く。ショウは、と、居た！

「お、若宮。ショウか？ちょっと待つて！」

顔見知りの男子が気を利かしてショウを呼びに行く。

鼓動を抑えつつ気合を入れ直していると、突然後ろから声を掛けられた。

「遙、何やつてるんだ？」

「一博隆。どうしたのこんな所で？」

「ああ、昨夜話したる? 今日はお袋が旅行で居ないから弁当無いんだ。」

「これから学食行く所さ。つて、なんで弁当一つ持つてんだ? もしかして俺の分か?」

博隆もショウの事は知ってるから、解つて言つてるよね。

「おひ、遙、昨日は悪かったな……って、芳野先輩と一緒にいた?」

ショウは博隆に会釈してから全然普通に話しかけてきた。

良かつた、怒つてないみたい…

「昨日つて、何か有ったのか?」

博隆が聞いてくる。なんてタイミング悪いの…

「あ…ええと、俺が遙に貸してくれつて頼まれたCDを忘れちゃったんですよ」

「お前には聞いてないよ。遙、本当か?」

え? 何それ? 私はビックリして博隆の顔を見る。

ショウもちょっとムッとしたみたい…

「え、ええ。本当だけど…」

「あつそつ。さて、遙、早くメシ喰いに行こ!」

博隆が私の手を握り、無理やり引つ張る。

「ちょっと待つてよ。これは…」

「俺のだろ? 当然。屋上ででも食あうぜ!」

呆気に取られた様なショウを残して、私は連れて行かれてしまった。

…何だつたんだ、今のは…?

芳野先輩に引つ張られて去つた遙が俺を何とも言えない顔で見ていた。

その手には一つ、弁当が握られていた。

…もしかして一つは俺の為のだったのか? いや、あのタイミングなんだから

芳野先輩に作つてきたんだろうな。遙は何をしに来たんだろうか?

つて、床に何か落ちてるや。

これは、遙の財布だ。引っ張られた時に落としたんだな。  
遙たち、屋上に行くつて言つてたな。

「博隆、ちょっと待つてよー！」

屋上の手前で我に返つた私は博隆の手を振りほどいた。

「このお弁当、ショウについてママが作ってくれたのー！

だから、ショウに渡さなきゃ…」

「遙！いい加減にしろよー！」

いきなり怒鳴る博隆に驚き、呆気に取られる私。

「いつもショウ、ショウって、お前の彼氏は一体誰なんだ！」

「…なに怒ってるの？だって、ショウは一人ぼっちなんだし…」

「そんなのどうでも良いだろ？お前の親戚とかじや無いんだからほ  
つとけよー！」

「…どうして、そんな事言つの？ショウはママの親友だったおばさん  
の子だし、幼馴染だし、

何よりも大切な友達だもん、ほつとけないよー！」

「じゃあ、俺よりもあいつの方が大切って事か？」

「なんでそうなるのよ！そんなの比べられないよー！」

「じゃあ今決めろよ。俺と別れるか、あいつと縁を切るかー！」

「…どうしたの博隆！なんかおかしいよー！」

「つるわこーー早く決めろよー！」博隆が私の肩を掴んで揺さぶる。

「痛いーやめてよー！」博隆の腕を振りほどく私。

その拍子にお弁当を落としてしまった。

「あつー！」

ショウの為のお弁当が床の上に散らばる。

私はペタン、と座り込んで必死でかき集める。でも、もう殆ど食べ  
れないよこんな…

思わず涙が流れ出す。「えつ、酷いよ、ふえつ、

悲しくて悔しくて思わず泣き出してしまう。

「お前が悪いんだからな！」

捨て台詞を残して博隆は階段を駆け下りて行った。

屋上への階段を上つてみると、なにやら言い争つてこいる声が聞える。

…遙の声だな？

俺が急いで階段を駆け上ると、芳野先輩が駆け下りてきた。

俺の顔を見て、「お前のせいだ！」と言吼えて掛けていく。

…意味不明だな…

その時、階段の上から遙の泣き声が聞こえてきた。

## 錯乱？

俺が急いで階段を駆け上ると、遥がぺたんと踊り場に座り込んで両手で顔を覆つて泣いている。

遙の前には、ひっくり返った弁当箱とその中身が散乱していた。

「遙ーどうした！」

俺は遙に駆け寄り、膝を床について遙の肩に手を置いた。

「ショウ…」

遙は涙でぐしゃぐしゃになつた顔を俺に向かって、

「『めんね、ひぐつ、ショウの、ふえつ、お弁当…』

そこまで言つと可愛い顔をくしゃくしゃさせ、俺にしがみ付いて泣き出した。

俺は焦つたが、あんあんと声を上げて泣く遙が可哀想で、そして可愛くて

ぎゅうっと抱きしめて背中を撫ぜてやつた。

五分ほど遙を抱きしめていると、誰かが知らせたのか遙のクラスの

担任である河合由香里先生がやってきた。

彼女は豪快な姉御肌の先生で、生徒の人気NO.1の美人英語教師だ。

「さて、そここのバカップル、痴話喧嘩は終わつたかね…

って、よく見れば苦学生ショウとミス我が校の遙じゃないか。幼馴染なのは知つてるが、ちと意外な組み合わせだわね」

先生の後ろには野次馬がわんさか付いて来ている。

「どうする、保健室に行くかね？遙の膝から血も出でてるしはつとして遙の膝を見ると、確かに血が出ている。床で擦りむきでもしたのだろうか。

「ひっく、大丈夫、です。ひっく…」

「いや、一応保健室に行こう。連れてつてやるから

「ひっく……うん……ぐすつ」

俺は遙を抱き上げ、階段を降りだした。

「きやあつーちよ、ちよつとショウ!」

「結構血が出てるわ。念の為だ」

遙が真っ赤になっているが、俺は構わず歩き出す。

「きやあ大胆!」「マジかよ!」

野次馬から嬌声が上がるが、

「お黙り! 怪我人運んでんだから問題ない!」

由香里先生の一喝で静かになる。

と、野次馬の中から亜由美がほつときとちり取りを持って姿を現し、「ここ」の掃除はしておくから、気にしなくて大丈夫よ」と言つてくれた。「サンキュー」と亜由美に答え、

俺は先生に礼を言つて保健室へ向かつた。

「ショウ、後で職員室に来て事情を説明して」と言われ、取り合えずは頷いた。

だが、なんて説明すれば良いのだろうか……？

保健室で遙をベッドに寝かし、先生に手当てを頼む。

遙が手当てを受けている間にジュースを買つてきて渡す。

「ありがと……」遙は礼を言つと、ジュースをチビチビと飲み始めた。

俺は何も言わずにベッドの脇に座り、ジュースを飲む。

保険の田中先生が昼食に行くから様子を見ててね、と言い残して出て行く。

少しの沈黙の後、遙が話しだした。

「ねえ、なにも聞かないの?」

「ああ、話したくなったら話してくれれば良いわ」

「……ショウはなんでそんなに優しいの?」

昨夜、私とママはショウの事忘れて博隆にて飯食べさせちゃつたのに……

遙の瞳から見る見る涙が溢れてくる。

俺は遙の頭に手を置き、良い子良い子とする様に撫ぜてやった。

「そんなの、怒るわけないだろ？ 誰だってうつかりする事はあるし、俺が今までお前やおばさんやおじさんにして貰った事からすれば取るに足りない様なことじゃないか。

感謝こそすれ、そんな事で怒るなんてとんでもないよ

「ふえつ…ひめんねショウ…ふええええ…」

ありや、本格的に泣き出しちゃった。

「ショウ…大好き…」

え…？

ガバッと抱きついてくる遙。

「おい、遙……しようがないなあ」

俺はちょっと迷つてから、ねずおずと遙の背中に両手を回して抱き締めた。

しばらくすると、遙の体から力が抜けてきた。

「おい、遙…？」

そつとベッドに寝かせると、遙はクークーと寝息を立てていた。

昨夜、きっと俺の事が気になつて眠れなかつたんだろうな…

心の中が暖かくなり、昨夜の寂しい気分が跡形も無く吹き飛ぶ。

俺は無邪気な顔で眠る遙が可愛く、そして愛おしくなり

思わずそつと遙の頬にキスをしてしまい、そんな自分に焦つてカーテンから外に出た。

「おう、チユウは済んだかね？」

「おわつ…！…由香里先生…！」

そこにはいつの間にか由香里先生がニヤニヤしながら椅子に座っていた。

「田中先生から留守番頼まれてさ、来てみたらお取り込み中だったから

「いいいいから居たんですか由香里センセー」

「うん。ショウ大好き、辺りからかな」

「うわあっ！！」

「あれはですねえ遙が申し訳ない余りに口走った事であり別に俺にラヴ。してるわけじゃないと思われますそして俺自身も別に遙にラヴ。してるなんて事は無い筈でありつまりどういう事かかいつまんで省略するとですね」

「落ち着け少年。昼飯食ったか？」

「……え、まだです。」

「弁当は？」「あっ！有ります」

「昼休みもそろそろ終わりだ。まあ、ここに持ってきて食いなさい。

遙は私が見とくから

「……はい」

俺は弁当を持ちに教室に戻った。ついでに、亜由美の所へ行く。

「あ！シヨウくん。遙ちゃんは大丈夫？」

「亜由美、掃除してくれてありがとう。遙は今保健室で爆睡してゐる。

「これから俺は由香里先生から事情聴取だ。 その前に、お前に貰つた弁当頂くけどな」

「あは、まだ食べてなかつたんだ。…それで、遙ちゃん一体何が有つたの？」

「うーん、正直俺も良く解らん。何が有つたか解つたらお前にも教えるよ」

「うん、待つてるね」

俺は途中でお茶を買い、保健室へと戻つた。

「おう、来たかね。まあ遠慮せずに食いたまえ」

「はい、じゃあ失礼して頂きます」

カバツと弁当箱を開ける俺。

「さうつ……！」

ガバツと弁当箱を閉じる俺。

「…なにやつとるんだ少年。虫でも入つていたか？」

「いいえ、なんでも！やあ、今日は良い天氣だなあ。ちょっと窓際で太陽光線に当たりながら食べようかな」

「…この暑いのに何言つてんだか。まあ、勝手にしなさいな俺は窓際に椅子を持つて行き、弁当箱を由香里先生から見えないよう開けた。

…弁当のじ飯の上に、ふりかけで大きくハートマークが描いてあり、その下に「愛」LOVEMIショウくん」

とひじきとしそで書いてある。亜由美、悪ふざけしそぎだろこれは教室で開けなくて良かつたぜ…

しかし、亜由美料理上手いな。マジ美味しかつたぜ弁当。食い終わつた所で由香里先生が声を掛けて来る。

「じゃあ、キミと遙の次の授業の先生には話付けて來てるから、事情聴取させてもらひつかね」

その瞬間、五限田のチャイムが鳴り始めた。

## 急転回？

「で、何があったのかね？」

由香里先生が聞いてくるが、さて、俺にも一体何がなにか…？

「一体、何があつたんでしょうかね？」

「…キミ、私をおちょくつとるのかね？」

由香里先生が微笑みながら額に青筋を立てる。

…」「怖え…

「い、いえ、俺にも本当に解らないんですよー。」

「…いいから、キミが保健室に遙をお姫様抱っこで連れて来て、ベッドに寝かせて「ショウ、大好き」って言われてチュウするまでを

客観的事実だけを時系列に話していくたまえ

「わあっ！－！チュウなんてして…ませ…んよ？」

「なんだその自信無さ気な自問自答ば。ほれ、けちつけやと喋るー。喋るなら早くしろ？喋らないなら帰れ！…もひろん教室へな

「誰の真似ですかセンセー…？」

「余計な突っ込みは入れんでいい。で？

えーと、まずは…

「そうですね、まず昼休みに遙が俺の教室にやつて来て…」

俺は、昨日の夜からの一連の流れを先生に説明した。

ふむふむと聞いていた由香里先生は、俺が話し終わるとパン！と膝を叩き、「よし、解った！」と一喝を上げた。

「え…？」

戸惑う俺に説明を始める由香里先生。

「まず、芳野が遙に対して取った行動は、キミへの嫉妬だ。ヤキモ

チだ

「はあ？ なんでそんな」

「まあ最後まで聞け。

キミと遙は幼馴染といつ所を差し引いても、傍から見ると仲が良すぎる。

もちろん、それはキミの人生事情による所が大きいが、そういう事は理解はしても納得は出来ないのが人間って言つものさ。

特に、恋に恋するキミ達の世代じゃな

「…はあ…」

「遙の事だから、芳野とトークしたり一緒に登下校してる時でもキミとの事を楽しそうに話しているだろ？」

芳野も解っているから堪えていたが、やはり納得行かなくなり、たまたま今日爆発したんだろう。まあ、間が悪かったんだな

「…なるほど」

「だがしかし、最上級生にして剣道部主将としてはちょっと情けない行動だから、

私が放課後ちょっと事情聴取と説教を行つ。キミも来てくれると有難いが

「はい、バイトは七時からだから大丈夫です。でも、遙はどうしますか？」

「そうだねえ…」

考え込む由香里先生。

「あたしも、一緒に話させて下さい」

シャツとカーテンを開け、赤い目をした遙が姿を現した。

「大丈夫か？ 遙。もう気分は良いのか？」

「うん、大丈夫…ありがとうショウ」

「おう、復活したかね。もう平気だな？」

「はい、由香里先生もありがとうございました」

「じゃあ、放課後に一度職員室に集合してから、指導室がどつか

空にてる船壁に移動して語をしようつか」

「あつ！」「

「な、なによショウーおどかさないでよ。」  
その時、俺は西村との約束を思い出した。

「どうした少年、突然叫んで」

…放課後 なぜいと遅れても廊下で

不振そうな表情をする一人。

ええと、俗に言う野暮用つてヤツが…

「ええと、うん

どうしようか…でも、隠しておいて後で遙にバレるとマズいしな。

「西村? どのクラスの? 何の返事だ?」

由利先生は何のことだか解らす混乱している

「一年の西村亞里沙にて知りますか?」

やつぱ、考へる事は誰でも大体一緒なんだな

シミヤが西野沙也んからハヤシタニ貰ったんですね

「説明書」で説明する。

「ああ、今日の放課後付き合いでかどりの返事をするんだ」

「… そ、うか、解つた。じゃあ職員室に来てもらひのうは放課後、四時半で良いか？」

「はい、大丈夫

「あたしも大丈夫です。どうせ部活有るし」

「せうか、じやあ芳野にもそう伝えておくから。

…とにかく、イヤなら答えなくて良いんだが、西村亞里沙にはなんて返事するんだ？」

うつ！まだ全く考えていなかつた…

「そうですね、どうしましようか…？」

遙が俺の顔をじっと見詰めている。

「…まあいい、さう言つ悩みは青春時代にしか出来ない贅沢な悩みだ。

じつへつと考えるんだな。さて、遙、キミは何か言わなくて良いのか？」「…

「え！…だつて、ショウの事だから私が何か言つ資格なんて無いし

のか？」

「ほう、じゃあ資格が有れば言いたい事は有る、と」

カーッと赤くなる遙。

「さて、次の授業まではまだ時間が有るし、放課後までもまだしばらく有る。

一人でじつかりと話合つてみれば答えば出るかもしれないな。

私は自習させてる連中の所に戻るから。ま、ごゆつくり

由香里先生は色っぽいワインクを一つして出て行つた。

取り残された俺達はチラチラとお互いを見詰め合つ。

…いつたい、どうすりや良いんだこの空氣…

誰か、知恵、いや勇気を俺に貸してくれ！

いや、他人も神様もこういう時に当てにしちゃいけない。

俺自信が答えを出して行動しなければ行けないと言つ事を

この一年でイヤと言つほど学んだはずだ。

ふと見ると遙の目から涙が溢れている。

「どうした、遙…どこか痛むのか？」

焦つて問い合わせる俺。

「……ううん、体はどこも痛くない。」

でも、とても切ないの……なんでかな、ショウの顔見ると…  
ショウの事考えると…胸が痛いの…」

遙は大粒の涙をポロポロと零している。

ガキの頃、遙とケンカして泣かした俺をぶつ飛ばしたオヤジがした  
説教を思い出す。

「いいか、男が絶対にしちゃならないのは、女の子を泣かす事だ！」  
オヤジは遙を抱き上げてあやしながら俺を叱った。

「男は女を守る事が仕事だ。よく覚えておけ」

俺はオヤジを、心から尊敬していた…そう、オヤジがこの世を去つ  
た今も。

よしー男は度胸！

「遙ー話が有る」

「…え？」

「遙、俺は、お前を…」

## お邪魔？

「遙、俺は！お前を！」

遙が俺の涙を浮かべたまま俺の瞳を正面から見詰める。  
くそつ！中々口が動かねえ！

行け！俺！！

「俺は！お前の事がす」

ガラツ！！

「田中先生！怪我人です！！！」

ドタドタドタドタ！！

「きやあっ！」

「わああつ！！」

俺と遙は比喩ではなく本当に一十センチほど飛び上がった。  
飛び込んできたのは体育教師と体操服の女子一団。

先頭の体育教師に抱かかえられた生徒の頭から血が流れている。

「あれ？田中先生は？」

体育教師が俺に尋ねる。

「あ…今職員室に行つてると思います」

「そうか、みんな、僕は職員室に行つてくるから佐藤の事を見ててくれ！」

体育教師はダツと保健室を出て行った。

何て間の悪さだ…つていうか、なんてお約束な展開だよ…

俺と遙は顔を見合させて苦笑するしかない。

「あ！ショウ先輩！」

その時、可愛らしい声が俺を呼んだ。

「お？あ！西村か」

そこには、ツインテールの可愛い娘が驚いた様に立っていた。

途端に、「あやーー」とか「えーあの人なの?」  
と言った黄色い声が聞こえて来る。

「マジ? あの人ガシヨウ先輩?」

でっかく田を開いて西村に詰め寄つてるのは頭から血イ流している  
佐藤何某だ。お前怪我人だろオイ…?

「どうしたんですか? 先輩。具合でも悪いんですか?」

西村が俺に聞いてくる。

「い、いや、ちょっと遙が調子悪くてな…」

「え! あつ! 若富先輩!」

気付いてなかつたのか西村…

ピピクうつ…!

遙の額に青筋が立つ。

あわわ、ちょっとマズいですよこれは…

「…あら、あたしの事はアウトオブ眼中だつたのかしら西村亜里沙  
さん?」

的を狙つて口を引き絞る時の顔になる遙。

凛々しくて好きな表情だが、このシチュエーションではメチャ怖え  
よ。

「え…」「めんなさい、そんな事無いです…」

驚き、齧えた様に俯く西村。

「おー遙、そんな言い方は無いだろ? 西村、気にすんなよ。

遙は今ちょっと体調悪くてブルーなんだよ

「はい、『めんなさい…』

俺は遙を見て、ちょっと怖い顔をする。

遙はアヒル口になつてちょっと拗ねた様な表情を見せたが、

「…いえ、あたしこそ言い過ぎたわ。『めんね西村さん』  
と素直に謝つた。

「いえ! とんでもないです。私はすみませんでした」「

慌ててお辞儀する西村。

ふう、焦つたぜ……それにしても良くな遙が譲ってくれたな。

俺は思わず遙の頭を撫で撫でしてしまった。

「わああ……」「何か良い雰囲気よね……」

女子生徒から妙な咳き声が漏れる。

「あなた達、そんな事より佐藤さんの手当しなくていいのー!?」  
かあつと赤くなつた遙が一喝する。

「あー忘れてた!」「濡れタオル濡れタオル!」「愛子大丈夫!?」「私もうダメかもしない…」佐藤のボケっぷりに噴出す俺と遙。  
そして、あたふたおひおろと騒ぎ出す女子一同。

仕方ねえな……

「遙」「ん。あたしは彼女の血を拭くから、アンタは包帯とか用意  
して」「りょーカい」

遙が洗面台でお湯を出して洗面器にため、タオルをお湯に付けて湿  
らす。

俺はその間に戸棚からガーゼと包帯、消毒薬等を取り出す。  
「どの辺りから出血してるの…ん、ここね。もう殆ど止まつてはい  
るわね。ちょっと我慢してね」

濡れタオルで傷口と流れた血を拭つ遙。そろそろだな。  
「遙。マキン持つて来たからちょっと退いてくれ。

佐藤ちゃん、ちょっと染みるぞ」

「はーい、シヨウ先輩」

すっと退く遙と代わり、傷口周辺にタオルを当ててマキロンを吹  
き付ける。

「痛い!!」叫ぶ佐藤。

「え、そんなに染みたか?」

「違います、誰かが私の背中抓つたんですね!」

佐藤が慌てて答える。

「はーい、私見てましたあ。抓つたのは亜里沙です!」

ポーテールの娘がしつとチクる。

「西村、なんでそんな意地悪するんだ?」

「だつて…愛子が…」しどろもどろになる亜里沙。

「愛子が、ショウ先輩に優しくしてもらつてゐからヤキモチ焼いたんでしょ?」

ポニーの娘がニヤニヤしながら答えた。

「ちょっと!止めてよ!」

亜里沙が真っ赤になりながら大声を上げる。

その時、体育教師に連れられて田中先生が帰つてきた。いつの間にか佐藤の頭には綺麗に包帯が巻かれている。

「あら、ありがとう。誰がやつてくれたの?」

「若富先輩とショウ先輩です!」

佐藤が元気一杯に答える。

「そうか、一人ともありがと!」

体育教師が俺たちに礼を言い、

「ほら、みんな行くぞ!田中先生、佐藤をお願いします」と言つて保健室を出て行く。

亜里沙が保健室を出る時に振り返り、

「ショウ先輩、放課後、待つてますから」

と俺を熱の籠つた目でじつと見ながら言った。

遙が悪戯っぽい表情で聞いてくる。

… とてもじゃないが、今なんて言えねえよ…

少しづつから俺と遙は田中先生に礼を言つて保健室を出る。まだ次の授業まで間があるな…

「ねえ、ショウ。わつき何て言おうとしたの?..」

遙が悪戯っぽい表情で聞いてくる。

「ああ、また今度で良いや。ちやんとしてからな」

「ふ〜ん、まあ良いわ」

ちよつと怒つたよつになる遙。

「あー、今夜つてアンタバイト有るのよね?」

「ああ、ガススタのバイトだ」

「そうよね…明日はどう?..」

「ああ、明日は大丈夫だけビ

ぱつと俺の前に回りこんで、

「ねえ、明日ウチにこ飯食べに来なさいよ。

ママが昨日の事を凄く気にして、お詫びしたいって

「そんなの、気にしないでくれって言つといて。

でも、せつからくだからこ馳走になりに行くよ」

にぱつと笑う遙。

「じゃあ、私も何か作ってあげるからー! リクエストは?」

「そうだな。じゃあ、シチューが良いな」

「ん、期待しなさいよー! じゃあ、あたし教室戻るから。放課後ねー!」

くるつと振り返り駆けて行く遙。

さて、俺は西村になんて返事をするか考えないとな。

泣かせなこよひこすむこせびすりや 良いかな…

落着？

キーンローンカーンローン…

さて、授業も終わりだ。

今日の放課後は大忙しだな…

「ショウくん、昨日はごめんなさい…」

お、和泉か。

「ああ、もういいや。今日、これから返事しに行くよ」

「今日は隠れ聞きしないから、『』ゆっくりね

…ゆっくり、はしてられないけどな。

「じゃあ、行くわ。フォローよろしく」

「え！ それって…」

絶句している和泉を残して俺は教室を出る。

はあ、気が重いな…

仕方ないとは言え、あんな可愛い子を泣かす可能性大かよ。

こりや、いつそ告白して振られる側の方が気楽なんじゃないか？

天国の親父、スマン。今日はアンタの教えを守れない、と思つ…

さて、美術室だ。ノックして、と。

ノンノン

「はい、どうぞ」

亜里沙の声が入室を促す。  
ガラッと戸を開けて中に入る。

「やあ、お待たせ」

にっこりと微笑む亜里沙。

「先輩、今日はありがとうございました」

「うん、気にすんなよ。ところで佐藤は大丈夫か?」

「はい、大した事有りませんでした」

「そうか…」

少し、沈黙が流れる。

よし！男は度胸！

「西村、返事をさせてくれ」

「はい…」

俯く亜里沙。くそ、気も口も重えよ。

「…」「めん！俺はお前の気持ちに応えられない！」

俺はバツと頭を下げ、心から謝った。

「…だと、思いました」

…え？

俺が頭を上げると、亜里沙はちょっと涙ぐんでいた。

「今日、保健室でショウ先輩と若宮先輩のやり取り見ていて解つたんです。

二人は、凄く好きあつてているんだなあ、つて…」

亜里沙の頬に涙が流れる。

「今の私じゃ、二人の間に入る事は出来ないんだなあつて…」

俺の中で罪悪感が増大する。

「だけど、若宮先輩は芳野先輩とお付き合いしているんですね？」

それが不思議で仕方ないんです。どうして、なんでしょうね…」

俺は絶句してしまい、答えられない。

遙は本当に芳野先輩が好きで付き合いだしたんだろうか？  
いやもちろん、嫌いなんて事は無いだろうが…

「だけど！私はまだショウ先輩を諦めたわけじやありません！」

だつて、若宮先輩と芳野先輩が別れて、

ショウ先輩と若宮先輩がお付き合いしない限り

私もチャンスはある筈だから…」

ポロポロと涙を零しながら微笑む亜里沙。

俺の胸がキュンと鳴った。

「だから、先輩、私を避けたりしないでくれると嬉しいです！ダメ、ですか…？」

「ここでダメ、なんて言えるヤツは男じゃない、よな…」

「お前を避けるなんてしないさ。」

俺は時間も金も無いから、あんまり遊んだりは出来ないけどな。  
それで良ければ」

「はい！私ももつと頑張って先輩の心を奪つて見せますからー。  
若富先輩がモタモタしてたら、私が先越します！」

「ありがとう、亜里沙。俺もお前や遙に愛想付かされないよつに良い男になるよ」

「あはっ！亜里沙、つて呼んでくれましたね！嬉しい…」

につこりと笑う亜里沙。とても良い表情だ。

「先輩、そう言えばバイク乗ってるんですよね？」

「ああ、原付だけどな」

「私も今度原付免許取ろうかと思つてるんです。

色々アドバイスお願いできますか？」

「ああ、もちろん！聞きたい事が有つたら遠慮なく聞いてくれ」

「はい、ありがとうございます！よろしくお願ひします！」

「じゃ、俺は行くね」「はい、さよなら先輩！」

そして俺は美術室を後にした。

時間は、四時十五分。ちょうど良い位だな。

俺は職員室へと向かう。廊下の角を曲がった時、遙と芳野先輩にバッタリ出会い。

「あ！ショウ！」「お、遙と芳野先輩か」

芳野先輩は俺を見て、バツの悪そうな顔で目を逸らす。

「…行きましょうか」遙の声で、三人揃つて職員室へ向かう。  
ノックをしてから職員室へ入ると、由香里先生が

「おう、三人揃つて来たかね。ちょっと待つてくれたまえ」と声を掛けってきた。

五分程の後、由香里先生に伴われて指導室に入る。

「さて、それではまず芳野から今日の昼に有つた事を聞かせてくれ。あ、ショウと遙は何か言いたい事有つても黙つててな」

先生に促され、芳野先輩がぽつぽつと話始めた。

内容は、大体事実を包み隠さず表現していく、

また、なぜ遙の事を無理に引っ張つて行つたんだという先生の問い合わせに、

「…ショウに対して、ヤキモチを焼いていたんだと思います」と正直に答えた。

また、遙に対して女々しい事をしてしまつて悪かつた、と謝り、俺にもハつ当たりして済まなかつた、と謝つてくれた。

やつぱ、芳野先輩も良い男だよな…

遙も何度も謝る芳野先輩に

「もう良いよ、博隆」と優しい視線を向けていく。

「なんだか、胸の奥がチクッと痛むが、それじゃ俺がヤキモチ焼いてることになるな…」

「ん、まあ丸く収まつたな。じゃあ今日はこれで解散にしようか…」由香里先生の言葉でお開きとなり、俺達は指導室から出た。

「じゃあ、私達は部活に戻るから」

「ああ、それじゃ。芳野先輩、お先です」

「ああ、バイト頑張れよ」

「じゃあショウ、明日ね」

「うん、お先！」

俺は一人と別れ、自転車置き場に向かつた。

自転車のカギを外していると、「ショウくん…」と声が掛かる。

「ん？あ、亜由美か」

振り向くとそこには亜由美が微笑みながら立っていた。

## 指切り？

「ひりりと笑いながら近付いてくる亜由美。

「ねえ、ショウくん、忘れ物してない？」

「あつ…！」

「『めん、亜由美。弁当箱洗ったのに教室忘れちまつた。取つてく  
る』

一瞬ポカンとしてからあはは、と笑い出す亜由美。

「そんなの明日でいいよ！忘れ物つて、遙ちゃんの事よ！

何が有つたの？解決したの？」

ああ、それか！まあそつちも忘れてたけど…

「…と言つ訳で、丸く收まつたんだ」

亜由美を後ろに乗せて走りながら、遙と俺の一件を外して亜由美に  
説明した。

「なるほどね～、あの芳野先輩でも遙ちゃんの事になると嫉妬に狂  
うのね」

「ああ、男つてのはやつぱ惚れた女の前じゃ弱いよな  
偉そうに、人事の様に言つ俺。

「…じゃあ、ショウくんも好きな娘の前じゃ弱いの？」

なんか意味深な事を言つてくる亜由美。

「…そうだな、弱いかもしれないな。まだ解んないよ」

突然、亜由美が俺の耳元に口を近づけて囁いた。

「ねえ、ショウくんの好きな娘つて誰？」

うわつ…びつくりした！

「ななな何をいきなり言つんだよお前は…！」

「ねえ、私に隠してる事無い？」

色っぽく呟く亜由美。

一体、何を言わせたいんだコイシ…

「黙秘なの？じゃあ、私が言つてあげる！な、何を言うんだ…遙の事か？」

「一年の西村さんに告白されたんでしょう？」

「その事か…ふう。つて、

「何で知ってるんだ！？」

俺の首に手を廻し、ぎゅっとくつ付いてくる亜由美。

…おい、肩から背中に掛けて感じるこのやーらかい感触は…！！

「んふふ~、ひ・み・つ」

ちょっと、ちょっとちょっと！

や、やばい…危険だぞコレは。特に体の一部が過敏に反応している！

「お、おい亜由美！あんまりくつ付くな！」

「何でえ？私の胸がぎゅってしてるだけじゃない

うふふうと笑う亜由美。耳に亜由美の暖かい息が掛かる。

ワザとやつてんのか「イツ！」

「だーっ！気が散つて危ないだろうがー！」のまま俺と心中する気か  
あつ！

すいっと離れる亜由美。ふう…

「それは流石にイヤだから勘弁して上げる。

そうそう、ショウくんお弁当どうだった？」

「あ、ああ、凄く美味かつたぜ。特に唐揚げ」

「そう、良かつた！で、メッセージはどうだった？」

…ああ、アレな。

「お前アレはちょっとふざけ過ぎだろう。アレを教室で開けてたら  
ちょっとしたパニックになつてたと思つぞ。

大体、ミス我が校のお前と遙で、遙は彼氏出来ちまつたから  
フリーのお前の人気がうなぎ上りな事を忘れるなよな。

俺を殺したいんなら効果的かもしれないが」

「…ふ~ん、冗談だと思ったんだ…」

…え？

いきなりむぎゅっと首を絞める亜由美。

「ぐえつ！…止めろ止めろ苦しいって危ねえつて…！」

「シヨウくんのバカ！」

ところで、西村さんには何て答えたの？

…なんでバカって言われたんだ、俺？

…と、西村への答えか、

「…えーと、それはな…」

遙と俺の事を抜いて、亜里沙との顛末を話した。

「と言う事は、西村さんはまだシヨウくんを諦めてない訳ね」「まあ、でもきっと直ぐに他のカツコいい男に目が行くだろ。大体、俺みたいなカツコ悪くて貧乏で成績も悪いモテないヤツにあんな可愛いコが告白してくるなんて、三年分くらいの運を一気に使い果たした気がして恐えよ」

あはははは…と俺だけが笑う。

あれ？亜由美も「そうよね！」とか言つて笑うと思ったのにな？

「どうした、亜由美。黙っちゃつて？笑う所だぞ？」

「…んーん、何でも無い…」

突然黙ってしまった亜由美。な、なんだこの重い空気は…

「そ、そろそろお前の家だな。今日は弁当ありがとうな」

黙っている亜由美。あの角を曲がれば亜由美の家だ。

「…ねえ、シヨウくん。今夜バイトだよね？」

「ああ、そうだけど」

「今日、ちょっと家に帰りたくないの。バイトが終るまでで良いから、

シヨウくんの部屋に居させてくれないかな？」

亜由美の様子が変だな…

「ああ、別に構わないが、散らかつてるぞ？」

それに、一応おばさんには言つておいた方が良いんじゃないかな？」「少し間を置いて、

「やつだね、じゃあちょっと家に寄ってくれる?」と答える亜由美。

俺は角を曲がり、亜由美の家の玄関のちょっと手前で自転車を停めた。

「ちょっと待つてね」

亜由美はカバンを持つとタタッと駆けて行く。  
五分ほどすると私服に着替えた亜由美がポシェットを持って戻ってきた。

「お待たせ! ショウくん。じゃあ、お願ひね!」

…よかつた、いつもの亜由美に戻っている。

俺は亜由美を乗せると、再び自転車を漕いで自分の部屋へと向かった。

自転車をドアの横に停め、カギを開けて部屋に入る。

「散らかってるのは勘弁してくれよ」

「わーい、お邪魔しまーす!」

なんだかはしゃいでいる亜由美。

最近、遙が合鍵で入つてくるからアレな本とかビデオは秘密の場所に隠して有るからその件については安心だ。

「結構良い部屋ね! こっちの部屋は何?」

「ああ、そこは前住んでた家から持つてきた荷物が入つた物置になつてる。

まあ、なんとか一人位寝られるスペースは有るけどな」

「開けても良い?」

「別に構わないよ」

ガラツと引き戸を開ける亜由美。

「…凄いね、一杯になつてる。でも、コレはショウくんの大切な宝物なんだよね」

「…ん、まあガラクタなんだから」

「つて、ショウくん! 部屋の中におつきなバイクが置いてあるんだ

けどっ！！」

「ああ、親父の形見なんだ」

そこには、親父が生前乗っていたバイク、スズキ・GSX750S  
カタナが静かに眠っていた。

親父は、本当は前に乗っていた1100のカタナを持っていたかつたんだが、

家族みんなで出掛けるのに大きい車が欲しいから、と1100カタナを売つて

頭金にしてハイエースワゴンを買った。

その後、お袋がへそくりで親父に買ってあげたのがこの750カタナだ。

排気量以外は1100も750もほぼ一緒のこのバイクだが、値段は一ヶタ違う。

だが、親父は大喜びして買つてもらつた750カタナを大切にしていた。

限定解除という凄まじい難関を突破しなければ乗れないでの今は置物と化しているが、

いつか必ず俺はこの750カタナに乗つてやる：

いかん、いつの間にか熱くなつて亜由美に語つてしまつていた。

こんな話、女の子にはつまらないよな。

「んん、そんな事ないよー…とっても楽しかったし、なんか凄く感動しちゃつた」

亜由美の瞳に涙が溜まつている。

「ねえ、免許取つてこのカタナに乗れる様になつたら、一番先に私を後ろに乗せてね！」

「…悪い、亜由美。一番乗りは先客が居るんだ」

「解つた！遙ちゃんね？」

ちょっと頬を膨らませる亜由美。

「」答。一番田じゃダメかな？」「

「じゃあ、私を乗せて軽井沢まで連れてつてー！」

亜由美はビックと軽井沢の方向を指しながら声を上げた。

「ああ、良じゼー！つつても、何年先になるか解らないけどな

「うー。じゃあ、その前にもつと小さなバイクで良いからー！」

なんでそんなに軽井沢に拘るんだ？まあ、良いか。

「じゃあ中免取つたら行こつかー！」

「うん！行くー！」

亜由美が小指を差し出す。

「指切りしてー！」

ゆーびきりげんまーん、嘘ついたーいはー一つ千本のーますー！

「おーと、バイト行かなきやー！じゃあ適当にしててくれな

「はーい、いつてらつしゃいー！」

俺は亜由美の声に送り出されてバイトへと向かった。

バイトが終ったのは午後十時、今日は意外とヒマだったな。  
DT50を飛ばして部屋に帰る。

亜由美、まだ居るかな？途中で弁当でも買つていいつかと思ったが、  
亜由美がまだ居るのならどこかに食べに出ても良いかと思い  
とりあえず何も買わずに帰る。弁当のお礼もしないとな。  
アパートに着くと、俺の部屋に電気が点いている。  
うん、まだ居るみたいだ。

「ただいま～」

自分の部屋に入るためにただいま、なんて言つの違和感が有るな。  
といつが、なんか久し振りだな、いつ顔つ。

「お帰りなさい！」

ドアが開き、亜由美が嬉しそうに顔を出す。

結婚すると、こんな感じなのかな…

ふとそんな事を考えてかあつと顔が熱くなる。  
いかんいかん、何考てるんだ俺は！

「どうしたの？シヨウくん。突然頭ぶんぶん振つて？」

亜由美が不思議そうな顔をする。

「あ、なんでもない。気にしないでくれ」

慌てて答える俺。

つて、何か部屋の中から凄くいい匂いがしてくるな。

「亜由美、メシ食つたか？」

「つづん、まだ」

「どつか、食べに行こつか？弁当のお礼に奢るよ」

突然亜由美がにこーつと笑う。

「えへへー、まあこいつち来てよシヨウくん！」

俺の手を握り、部屋の中に引っ張る亜由美。

「な、なんだよ。どうした…って、うおおおー…」

俺は部屋の中に入り、思わず歓声を上げてしまった。

部屋のテーブルの上には、美味そうな食事の支度が出来ていた！  
鶏の唐揚げ、鳥のササミのサラダ、肉じゃが、ジャガイモとワカメ  
の味噌汁…

俺の大好物ばつかじやん…！

「これ、亜由美が作ったのか？」

「へへへー、そうでーす！ね、嬉しい？」

俺はマジ感動していた。

「ああ、凄く嬉しい。ありがとうございます亜由美！」

「うふふ、ちょうど出来た所だから熱々だよー…

冷めない内に呑じ上がれ！」

俺と亜由美はテーブルに着き、「いただきます！」と叫んで食べ始めた。

「…んまい…！」

思わず叫ぶ俺。

「わあ、嬉しいなーどんどん食べてねー！」

「もちろんーむぐむぐむぐ…」

夢中で食べる俺を嬉しそうに見詰める亜由美。

めちゃくちゃ腹が減つてたのもあり、俺はあつといつ間に三杯飯でおかずをほとんど食べ尽くしてしまった。

「ご馳走様！あー、美味かつたあ

いつの間にかお茶を淹ってくれている亜由美。

お茶を飲みながら、俺は心の底から、

「亜由美、お前本当に良い奥さんになれるなあ。

美人で、優しくて、料理が美味しいくて、良く気がつく。

うん、最高のお嫁さんだ！」

と思い、何も考えずにそのまま言葉にした。

「えへ、それ褒めすぎだよ。お世辞でしょ？」

「いやマジで！ホント、俺がお前に吊り合える位の男だったら

ブロボーズ  
絶対求婚しちまうけどな」

思わず口をついて出た言葉に、まさか亜由美があんな反応をすると  
は。

俺は夢にも思わなかつたとも。ああ。思わなかつたさ……

ただ今午前六時。

なんで俺はこんな所で朝を迎えているんだろう…

ベッドの上に寝転んだ状態で、痛む左腕を動かしてみる。  
包帯とギプスで固められた左腕がまともに動くようになるには  
一ヶ月は掛かると言われてしまつた。

しかし、それ以上に痛いのは泣きじゃくる遙に引っ叩かれた左頬と、  
遙の言つた言葉…「待つてたのに…！」

最悪だな、俺…

不可抗力とは言え、遙と亜由美。大切な一人の少女を泣かせてしま  
つた…

親父、俺は現在、最低な男に成り下がつちまつたよ…。

さて、どうした物だらうか、この事態。

あと一時間程でみんながやつて来て事情聴取になるだらうな。

担任の浅井先生も来るし、由香里先生も来るらしい…

なんかもう、死にたくなつてきたよ…  
いつそ、大地震でも起こつてくれないかな…  
はあ…

## 衝撃！？

午前七時、朝食の配膳が始まる。俺の所にも看護婦さんが食事の乗ったトレイを届けてくれた。

そう、俺は今病院にいる。

左手にはビビジが入り、右足は酷い打撲で歩けない。

「シヨウくん、一人でごはん食べられる？」

看護婦さんが優しく聞いてくれる。

「はい、大丈夫です」

どうせ、食欲なんか無いしな…

なんでこんなことになっちゃったのか、もう一度昨晚の出来事を整理してみる。  
あれは、俺の迂闊な一言から始まつたんだっけ…

「いやマジで！ホント、俺がお前に吊り合える位の男だったら  
絶対求婚しちまうけどな」

亜由美の作ってくれた食事の美味さに興奮した俺は、最大級の贅沢の積りで亜由美にそんな言葉を言った。  
その時、お茶を入れていた亜由美の手がピタ、と止まった。

「…ホント？」

俺はお茶を啜りながらのほほんと言つ。

「ああ、ホントさーだけど、残念ながら俺程度の男じゃ  
とてもお前の相手は務まらな」

「絶対に！ホントなのね！…」

俺の言葉を遮り大声を上げる亜由美。

思わず呆気に取られる俺。

「…どうしたんだ？亜由美。 そんな大声出して」

亜由美の瞳から大粒の涙が零れだす。

「…おい、亜由美、どうしたんだ？何で泣いてるんだ？」

顔を掌で覆い、泣き出した亜由美。

俺はどうしようも出来ずおろおろするばかりだ。

「ショウくんって、残酷だよ…！」

な、何がだ！？意味が解らないぞ！

「だつて、だつて…！そつやつてすぐにトボけて！」

私が、どれだけショウくんの事を好きなのか気付かもしないで…。ずっと、ずっとショウくんの事好きだったんだよ…」

…ええ！？

「それって、小学校の頃だろ？」

「…気付いてたの？あの頃」

やべえ！墓穴掘ったか？

まさか最近遙に聞いて知ったなんて言えないしな…

「さ、最近あの頃の友達から聞いたんだよ。お前が俺の事好きだつたつて」

「遙ちゃんから聞いたのね…」

三秒でバレた。なんてこいつた。

「ショウくんは嘘つきじゃないよね…」

真っ赤な皿をした亜由美がすくっと立ち上がった。

「ねえ、さつき言つたよね。私をお嫁さんにしたいって

ちょっと待てえつ！！

「アレはだな、お前の料理が凄く美味かつたから、いい嫁さんになるなつて」

「『』まかさないでつ！だつて、その後言つたじやない！」

俺だつたらプロポーズしちまうつて…！」

普段はほんわかした雰囲気の亜由美が物凄え恐い。

「だ、だからあれは、もし俺がお前に見合つほどの男だつたらの話で」

「ショウくんは私なんかには勿体無い男の子だよ！」

だから、私をお嫁さんにしてよつ！嘘はつかないよね！？」

亜由美の目が完全に据わつてやがる。

「ど、どうしたんだよ亜由美！なんかおかしいぞお前！」「もうやだ。もうこんな気持ちでくよくよじてゐるやだもん！」

亜由美がいきなり服を脱ぎ出した。

「でええつ！待て！亜由美！早まるな！－！」

ブラウスを脱ぎ捨てる亜由美。可愛らしくピンクのブラがここにこりは。

…やつぱ、なかなか胸有るな亜由美。

つて、そんな場合じゃねえよ俺つ！！

俺が内面世界インナーワールドで右往左往している内に

無情にもスカートがハラリと床に落ち、ブリーフともやうのピンクのショーツがこんにちま。

ウエストは細くていい感じにくびれている。お尻は大きめで安産型だな。

だああ！ヤベえ俺！錯乱してゐるよ混乱してゐるよ！－！

「亜由美いつ……止めろつてえ！－！」

手を後ろに廻し、ブラのホックを外そうとしている亜由美を止めようとして

亜由美に向かつてダッシュを掛ける俺。

しかし、焦つた俺は亜由美と俺の間に有るテーブルの存在を失念していた。

「どうがりつしゃああああああ！－！」

物凄い勢いでテーブルに蹴躡き、テーブルをひっくり返しながら宙を舞う俺。

スロー・モーションで近付いてくるのは、赤い目をしたびっくり顔の  
亜由美。

いや、逆だ。俺が亜由美に近付いて行つてゐる。  
そう、空中をウルトラマの様に飛びながら。  
俺の顔は亜由美の胸に飛び込んでいく。そのまま、亜由美を押し倒しながら床に転がる。

そこには、ふたつ折りにしてたたんで有る布団が有つた。  
勢い余つて布団に突つ込む俺達。

卷之二

「ああああああああ」

病て死え

スローモーションが絞った時、俺は亜由美の胸に顔を押し付けてから、うぶつ倒れていた。

「何いまの凄い音!! どうしたのショウ!!」

ガチヤ ガチヤ !!! ハンツ !!!

遙の声が聞えると同時にカギが開きドアも開き、遙が部屋に踊りこんできた！様だ。

なにいって!!と顔を上げるとこた俺の頭には垂れ下がる髪の髪を引いて、

カハ」と頭を上げた瞬間は、三の手、夕がが「チ」と音を立てて弾けた。

そして頭を上げ、ドアの方を向いた俺の顔には唖然と立ちつくす遙と見知らぬおっさんが映った。

「な、何やつてんのよバカシヨウつ！！」

我に返つた遙が鬼の様な表情で叫ぶ。

「お、落ちけつ遙！」俺が落ち着け。

「コレは不可抗力だ！ワケが有るんだ！！」

「ふざけんなあつ！ブラ頭に被つて何やつてたのよーーー！」

ハツと気付き、頭に手をやると亜由美の可愛らしいブラをしつかり被つている俺。

急いで外そうとするがどこかに引っ掛けついて外れない！

「このガキいつ！よくも亜由美の純潔をおつーー！」

見知らぬおつさんがあながら俺に向かつてくる。

なんだ、誰だ、どうしたってんだ！！

「止めてよパパっ！」

亜由美が叫ぶ。つて、パパあつーー？

お父様でいらっしゃいますか。娘さんにはいつもお世話を…それどころじやネエだろ俺っ！

良く見るとお父様の手にはマグライトのかいのが握られている。それ、警棒としても使われるんですがネ？

あつという間に距離を詰めて俺にマグライトを振り下ろすお父様。あんなモノを頭に直撃食らつたらマジ死ぬわ！

咄嗟に横にかわそうとする俺。その時、さつきテーブルでしこたま打ち付けた右足が

ズッキーンと痛みやがつた。交わすのが遅れたあつーー！

両手を上げ、頭を庇う俺。

ガツーー！

左腕に鈍い痛みと痺れが走り、ひっくり返る俺。

「痛つーー！」

俺の後ろにはショーツだけとなつた亜由美が居た。

「貴様あつー亜由美から離れるー卑怯者つーーー！」

「おじさんーショウに何すんのよー止めてよーーー！」

お父様を羽交い絞めにする遙。

「そうよパパのバカつ！－私はシヨウくんのお嫁さんになるんだからあつ－！」

…あつ。亜由美さん。貴女ね。もうね。火に油、って知ってる？

## 戸惑い…？

「ショウくん、『飯全然食べてないじゃない』  
看護婦さんが溜息を付く。

はつと我に帰る俺。

「すみません、頭が痛くて…」

俺の頭には包帯がぐるぐる巻きにされている。

「あら、大丈夫？ 痛み止めの注射しておく？」

心配そうな顔で聞いてくれるが、

「いいえ、我慢します。みんなが来た時に寝てるのもなんだし」

「そう…無理しちゃダメよ。我慢できなくなったら直ぐに言ってね」「はい、ありがとうございます！」

そう、さつきから痛み止めが切れたのか頭の傷が疼き出した。

俺はまた、昨夜の事件の回想に入つていった…

後ろから亜由美が俺にぎゅっと抱き付く。

「なななななな…！」

絶句するお父様。そりやそうだろな。

ぶんつ…！

「おわつ…？」

突然お父様が横に吹っ飛び、キッチンの床に転がる。

「ショウ！…どういう事なのよつ…！」

お父様を力任せに投げ捨てた遙がダッシュで俺に飛びつき、襟首を捻り上げながら叫ぶ。

遙の顔と俺の顔は数センチの至近距離。遙の大声で耳がキーインとなつてしまつ。

と、遙の瞳から大粒の涙がぽろぽろと零れ出した。

「待つてたのに…！」

「…え？」

「あなたの言葉、待つてたのにっ！！」

遙は叫ぶと同時に俺の頬を引っ叩いた。

びつたーーん！！

物凄い衝撃と共に俺の視界に星が舞う。

「ショウくん！大丈夫！？ 止めて！遙ちゃん！私のショウくんを打たないで！！」

遙の顔が夜叉の様な表情になる。

俺に抱き付いている亜由美の身にはショーツしか付いてない。豊かな胸は俺の背中にむぎゅっと押し付けられ、

真っ赤になつて泣いている可愛らしい顔は俺の顔の右にぴつたりとくつ付いている。

ダメだ。今何を言おうとも、ただの言い訳にしか聞こえないだろう。

「亜由美を返せえええ！！」

突然響いた声に驚き、そちらを見た瞬間。

ガツン！と鈍い音が俺の脳内に響き、目の前に火花が散った。口と鼻の中に熱い感触が広がり、目の前が真っ赤になる。

あ、マグライトで殴られたんだな、と妙に冷静に分析しつつ、俺の意識は闇に沈んでいった：

ふと目を開くと、

そこには見知らぬ天井。

「お兄ちゃん！大丈夫！？」

可愛い声が聞こえる。と同時に物凄い頭痛が俺を襲う。

「うつ！」痛みをこらえながら声のした方を向くと、

そこには半泣きになつた沙里とベッドに突つ伏して眠つている加奈の姿が有つた。

「沙里、か…ここは、どこだい？」

「良かつた…ここは病院だよ。どこか痛くない？」

「ああ、頭がかなり、な」

俺が答えると「ちょっと待つてね！」と答え、急いで駆け出していく沙里。

一体何が有ったんだろ…今日は何日だ？今、何時なんだ…？

「ショウくん、気が付いたのね！」

ドアが開き、看護婦さんと一緒におばさんが入ってきた。

「よかつた…一時は意識不明になつてたから、もう…」

そこまでいふとおばさんは両手で顔を覆い、泣き出してしまつた。

「おばさん、泣かないで…」

俺も困つてしまつ。

「ショウくん、気分はどう？頭はどんな風に痛いの？」

看護婦さんが聞いてくる。

「あ、心臓の音と一緒にズキズキと割れるみたいに痛いです」

「そう。今、痛み止めの注射を用意するからちょっと待つてね」

看護婦さんが病室を出て行く。

すると、看護婦さんと入れ替わる様に顔をちょっと背けて俺と目を合わさない様にした遙が病室に入つて來た。

「遙…」

「頭は、大丈夫なの？」

「なんだか、氣でも狂つちまつたかのような聞き方にちょっと苦笑いしてしまつ俺。」

「ああ、なんとかな。といひで、俺はやつぱ痴由美のお父さんに殴られたのか？」

「ええ、黒い大きな懷中電灯でね。物凄く血が出てホントに驚いたんだから…」

目を逸らしたまま答える遙。

その時、看護婦さんが注射を持って帰つてきた。

「さあ、痛み止めの注射をしますよ。睡眠効果も有るからすぐに眠くなると思うわ」

看護婦さんの言葉を聴き、おばさんが涙で真っ赤になつた目を俺に向ける。

「ショウくん、じゃあ明日の朝また来るわ。

担任の浅井先生と、遙や亜由美ちゃんの担任の河合先生も来られるやうだから安心して」

「う～む、何を安心すれば良いのだらうか……？」

「あと亜由美ちゃんとお父さんも来ると悪いけど、怒らないでね……」  
おばさんが目を伏せて呟く様に言ひ。

「とにかく、明日ちゃんと話しちょい。じゃあ、私たち帰るから。お休み、ショウくん」

「ありがとうございました。お休みなさい」

おばさんは眠つたままの香奈を抱き上げて病室を出て行った。  
沙里と遙もそれに続く。

遙が病室を出るとき、ふつと俺の方を向いて、  
「あたし、待つてたんだから……」

と言い、涙を流しながらたつと出て行く。

「待つてた、つて何を……？」

食事に行くのは明日の夜ハズだし、今夜遙となにか約束してた覚え  
は無いんだけどな……

注射が効いてきたのか、俺は遙の言葉に対する疑問を考えながら眠  
つてしまつた。

## 現況認識？

昨夜の事を思い出すと、遙の言葉の意味がなおもやう解らなくなる。

一体、遙は何を待っていたと詫ひのだらう。

いくら考えても解らない。

うへん…

「ノンノン

誰か来たな。

「シヨウくん、入るわよ

遙のおばさんか。

「おはよー、シヨウくん。良くなれた？」

「うん、なんとか。」

「怪我の方はどうなの？」

心配そうな顔をするおばさん。

「うん、大丈夫だと思ひ。まだちょっと痛むけどね」

その時、半泣きの亜由美が入ってきた。

「シヨウくん…ごめんね、私のせいで…」

亜由美はポロポロと涙を零している。

「ああ、大丈夫だから気にすんなよ」

俺の言葉は本当だ。

俺がもつと亜由美の気持ちを考えて喋れば、

亜由美だってあんなに取り乱したりしなかつたはずだ。

「パパはまだ警察に居るから、後でまた謝りに来るわ。

代わりに、パパの奥さんが来てるんだけど入れても良い?」

「なんだ?パパの奥さんって。お母さんって事だろ?」

「あのね、畠田美ちゃんのお父様は昨年再婚なやつたの。

だから、今日は畠田美ちゃんのお義母様がいらっしゃってるの」

「止めておばれーー私のお義母さんじやなくて、パパの奥さんだか

りーー」

畠田美が叫ぶ。

そうか、最近の畠田美の様子がおかしかったのは、お父さんの再婚のせいが。

「畠田美、せっかくお見舞いに来ててくれたんだ入ってもらひてよ」  
俺は畠田美に優しく囁く。

「…じゃあ、呼ぶからちよつと待つてね」

畠田美はやうやくと、部屋を出て行った。

「おばれーー遙は?」

「畠田美ちゃんのお義母さんと一緒に待合室で待つてね。

シヨウくん、遙と何か有ったの?

昨夜は、シヨウくんの為にシチュー作るんだつてとても張り切つ  
ていたのよ

「…俺にもよく解りないんだけど、昨晩の事件が原因だとは思つん  
だ」

おばさんさうりと首を傾げ、

「わうね、まあ多分ヤキモチでしうけび」と囁いて苦笑した。

「ヤキモチ?」何が?誰に?…つて、ああー。

「やつと解つたのね?…そつ、あなたと畠田美ちゃんによ。

」このだけの話だけど、遙はシヨウくんの事好きなのよ。  
だけど、芳野くんと成り行きみたいな感じで付き合いだしたから  
シヨウくんへの恋心は自分でも知らない内に封印してたんでしょ  
うね。

だけど、シヨウくんが一年生の娘に告白されたり、

一昨日、芳野くんが来てショウくんの事忘れてしまった時の後悔の念なんかで

自分の気持ちにやつと氣付いたんでしょ」「う

…まあ、俺も似たようなタイミングで自分の気持ちに気付いたんだけど。

「そのタイミングで昨晚の事件が起って、遙は自分でも何が何がか解らない位

大混乱しているんだと思うわ。だから、遙の事許してやってね」

なるほど…あつ…！

「解つたあーー！」

俺は大声で叫んだ。

「きやつー？どうしたのショウくん？」

突然叫んだ俺におばさんが驚いている。

「あ、ごめんなさい。何でもないです」

おばさんに謝る俺。

…そうか！遙が待っていた「言葉」ってのは、俺からの告白だ！

あの時、保健室で言おうとした言葉…！

邪魔が入って先延ばしなったけど、きっとあの言葉を待っていたんだろう。

だから、俺と亜由美との事を誤解してあんな事を口走ったんだろう。

「何が解つたんだ？少年」

突然響いた声に驚いて部屋の入り口を見ると、花を持った由香里先生と

俺の担任の浅井先生、そして遙に亜由美に見知らぬ女性が入ってきた所だった。

「おはよー、ショウ、怪我の具合はどうだい？」

由香里先生がのほんとした声で挨拶する。

「災難だったようだな。大体の事情は聞いてる

担任の浅井先生も心配そうに聞いて来る。

「はい、ご心配掛けて住みませんでした、」

俺は一人の先生にお辞儀する。

「ほれ、亜由美、ショウウにお義母さんを紹介したまえ」  
由香里先生に促され、亜由美がしぶしぶといった感じで紹介を始めた。

「…ショウくん、この女性はパパの新しい奥さんのまどかさん」と  
ウェーブの掛かった長い黒髪の美女が深々とお辞儀をした。

「はじめてまして、私は南の家内のまどかです。

この度は主人がとんでもない事をしてしまって眞に申し訳有りませんでした…」

心の籠つたお詫びに、俺はちよつと慌ててた。

「いえ、まあ大した事…は有りましたが、お氣になさら無い様にして下さい」

まどかさんが頭を上げる。

かなり若い女性だ。おそらくまだ二十台か、少なくとも三十台前半だろう。

「主人も早まつた事をしてしまつたと大変後悔し、反省しております。

また後ほど三人でお邪魔しますので、よろしくお願ひいたします  
もう一度深々と頭を下げる。

「ええ、お待ちします」

「もうお詫びは済んだんでしょう。じゃあ帰つて下さい」

亜由美が冷たく言い放つ。

「ええ、亜由美ちゃんは…」

「私の事は放つておいて下さい。構わないで…」

「…じゃあ、私は警察に行きます。気をつけて帰つてきてね」  
出て行くまどかさんに返事もせずに亜由美はそっぽを向いた。

「…さて、複雑な家庭の事情を目の当たりにした所でなんだが、

とりあえずショウくん、何故キミが入院するハメになつたか理解

出来るかね？」

「なんとなく、ですけどね。幾つもの誤解とバッジティングが最悪の方向へ働いたってトコでしょ？」「

くくく、と笑う由香里先生。

「さすが、苦労しているだけあって既に高校生とは思えないほど大人びているなキミは。

そう、その通りだ。まあ、ここにいる関係者の理解を深める為にも私が聞き込んだ状況推測結果を披露しましょうか」

：俺が亜由美を家まで送り、再び亜由美と一緒に家を出た時、家にはまだ亜由美のお父さんは帰ってきておらずまどかさんしか居なかつた。

まどかさんに行き先を聞かれた亜由美は「ほつといでー」と怒鳴り飛び出す。

それを追つたまどかさんは俺の自転車に乗つて去つて行く亜由美を見た。

そして亜由美は俺の部屋で食事を作つて俺を待ち、帰つてきてから一緒に食べ、

その後に俺の不用意な発言により大胆な行動に出てしまった。

その頃、帰宅した亜由美のお父さんはまどかさんから経緯を聞き、とりあえず亜由美を待つてみたが十一時を過ぎても帰つて来ない。余りにも遅い帰りに心配が高じて心当たりの友達としてまず遙に連絡し事情を話した。

遙は亜由美を自転車に乗せて去つた少年の事を聞き、もしかしてシヨウではないかと思い

遙の家にやつってきた亜由美の父さんと俺の部屋へ来て、俺がテーブルに蹴躡いて立てた音に驚いて合鍵で入ると

そこには半裸の亜由美に伸し掛かっている俺が居た、と。

亜由美の父はあられもない姿の愛娘を押し倒している俺に激怒し、すつたもんだの末左手と頭部に大型のマグライトを振り下ろし、

左腕の骨にヒビを入れ、脳挫傷一步手前の怪我を負わせた……

「で、なぜ亜由美が半裸でショウに押し倒されていたかは亜由美本人から説明有り、と。

の有る人は？」

もちろん、誰も手を挙げない。

「えへへ、さつき畠由美のお父さんが警察に面会するつて言つてました  
と、おずおずと手を挙げたのはこの俺自信だった。

7  
卷之三

「うふ、办ておれども、我井君がお出でになつた」

「いくら誤解やら何やらが有つたとは言え、アメリカでは持ち運びに規制すら有る様な、

またアメリカンポリスが正式に警棒として採用している様な大きなマグライトで

らな。

これでは間違いなく傷害だし、縁起でも無いが、もしシヨウが死にでもしたら

「なるほど……」

まあ確かに痛かつたからな。腕も頭も…そして心も。

おばさんが優しく言ってくれる。

確かに俺は、治療費を払えるだろ？かってのが懸念だったから安心する。

「当然です！ちゃんと慰謝料も払わせるから安心してねショウくん」

る。

遙は入ってきてから一言も口を利かず窓の外を眺めている。

それについても、これからどうするかね…

## 大好き！

病室に居る全員が口を閉じ、少しの間沈黙が流れた。

と、ノックの後にドアを開けて医者せんせいが入ってきた。

医者はおばさんと学校の先生一人に挨拶をし、俺の怪我の具合を診てくれた。

そして、今朝時点での容態説明を始めた。

「うん、とりあえず頭部の精密検査結果待ちだが多分大丈夫だろう。腕は昨晚も話したとおり完治には一ヶ月掛かるが後遺症はないと思つ。

足の打撲は酷い事は酷いがただの打撲なので心配は要らない。」

俺を含むその場の全員がほっと胸を撫で下ろす。

ただ、頭の怪我が気になるので念の為今週一杯入院してもうづ、と言われてしまった。

医者の説明を聞いた由香里先生は、

「まあ、今日は本当に大人しくしてなさい。

亜由美は後でお父さんと奥さんがまた来るだろうから、その時に一緒に来るなら

今日はまあ、学校は安みつて事にしておく。

若富さんのお母さんは、保護者の代わりに付き添つて下さるんですね？」

と聞いてきた。

「はい、ショウくんの付き添いは私がやりますのでお任せください」

「それでは、お願ひします。

じゃあ、亜由美とりあえず帰ろうか。家まで送つていいくか！」

え！と驚く亜由美。

「私、パパ達が来るまでショウくんに付いています」

「いや、それは若富さんがやってくれるそうだから大丈夫。

「とりあえずキミも一度帰りたまえ」

亜由美は何か言いたそうに口をもじりながら、

由香里先生の田を見て諦めたように「…はい」と俯いた。

「じゃあ、行きましょうか浅井先生。それでは若宮さん、お願ひします」

「はい、お任せください」

何度も俺を振り返る亜由美を引つ張つて由香里先生は病室を出て行つた。

「さて、おばさんショウくんの着替え持つてくるわね。

遙、あなたも今日は学校休んで良いからさうとショウくんに付いててあげて」

窓の外を見つめたままだつた遙がようやく俺に田を向ける。

「…はい」短く答える遙。よく見ると田が真つ赤だ。

「じゃあ、お願ひね。ショウくん、何か欲しい物有る?」

「いえ、大丈夫です」

「そつ、何か有つたら遠慮なく言つてね」

おばさんは病室を出る時、俺にウインクをして出て行つた。

鈍い俺でもこれは解る。おばさんが気を利かせてくれたんだな。よし、チャンスだ!

「遙、話があるんだ」

真つ赤な目をした遙が俺を見る。

「…なに?」

そんなに離れていないで、じつちに来いよ

遙がひょこひょことベッドの脇に来て、椅子に座る。

「…なに?」

改めて見るとひどい顔してゐる。

いつも艶やかな黒髪はボサボサ、

大きくてぐるぐると良く動くちょっとブランウンが掛かつた瞳は真つ赤に充血し、

適度に焼けている健康的な肌も心なしか荒れているようだ。

「アリバの煙草の配り」

アヒル口をさらにそれっぽく突き出しながら文句を言つ遙。

— १५८ —

俺は我慢できずについ噴出してしまった。

「は、なんの

が口笛で人の声を出

それでこんな事になつたんだからほんとに自業自得なんだからね

!

マシンガンの様にまぐこと立てた。うん、一マジ正直に立ってないぢやな。

ああ、恵がいたでモ、俺にてはシモテる所だよな！」

「なはなは何うてんのよバカじやなーのあんたー

たまたまあんたを好きな女の子が三人バツテイン

あなたがモテるってワケじゃないんだからねーー勘違いしぃさん

ナニ

馬をハシニシテ、色口を口にしながら叫ふ遷

ん？三人？

THE JOURNAL OF CLIMATE

その瞬間、遙の顔が瞬間湯沸し器の様に更にカーネットと真っ赤になつた。

これはマジ見ものだつた。人間の顔つてこんなに一瞬で色変化するものだつたのか。

頭と両手をぶんぶん振り回しながら「わ」を繰り返す遥。

俺は遙の顔をぱっと両手で抑えた。

「…………！」

自分ででもじりじりしい思いのか解らなくなつてる口をパクパクさせてキヨダる遙。

俺はすうっと深呼吸してから、遙の皿を見詰めながらはつと音つた。

「遙、俺、お前の事好きなんだ。

芳野先輩と付き合つてるって解つても、

お前が一番、好きなんだ」

「はひょえつーおつりーーー？」

奇声を上げて皿を白黒ぐるぐるする遙。

しかし、手をばたばたするのは止めて、顔に生気が戻ってきた。すーはーすーはーと呼吸をしている遙を見ながら、俺は黙っていた。

しばらくして、すーっと息を吸つた遙がきつと俺の皿を見つめて怒鳴りだした。

「バ、バカシヨウー亜由美のことはどうすんのよー。

あの娘、本気であんたに恋してるのよー。」

「それはこれから良く考えるわ。亜由美は今、かなり不安定な状態だから

あんまり無下にすると何するか解らないしな。

亜里沙は大丈夫。あの子は芯の強い子だから。

それに、別にお前に今すぐ付き合つてくれつて言つてる訳じゃない。

お前だって芳野先輩の事があるだろうし。

ただ、俺の気持ちをお前に伝えときたかったんだ。

遥、俺はお前が大好きだ。以上！」

遥は真っ赤になつて下を向いてしまつた。

もしかして、遥も俺のこと好きだと思つたのは俺の勘違いだつたのか？

そんな不安に俺が苛まれだした時、ボソッと遥が呟いた。

「…あたしも、ショウの事が大好きなんだから…」

…うしつ…！

俺は心の中でガツツポーズをした。

その時、ふんつーと気合を入れた遙がバツと顔を上げた。

「昨日、博隆とお別れしてきたわ。自分の気持ちに気が付いたから、

このまままづると付き合つてるのはいけないと思つたの。

だから、私、今、フリーなんだから…だから…その…」

俺は遙が何を言つてほしいのか、正確に理解した。

「遙、俺と付き合つてくれないか？」

俺たちは十秒ほど見詰め合つていた。

「いいよ…」

遙が小さく答えた。

「だけどつー！絶対浮氣なんか許さないし私を一番にしてくれなきやダメだからねつー！」

目をバツテンにして叫ぶ遙。

「りょーかい、俺の遙ちゃん」

俺の言葉にまたまた赤くなつて黙る遙。

そして、突然立ち上がりドアを開け左右をじっと確認している。

…なにやつてるんだ？

よしーと一声上げて俺の隣にジドードと床つてきて、すとんと椅子に座つた。

そして、俺に顔を近づけながらふつと皿を瞑る。

なるほど…俺は笑つて、そつと遙の唇に自分の唇を重ねた。

バーン…！

「お兄ちゃん！大丈夫！？」

「シヨウ兄ちゃん遊びに来たよ～」

突然ドアが開きカナサリが元気良く飛び込んできた。

「！」

「な！」

驚いた俺は唇を離してカナサリに振り向く。

「…あれ？なんでハル姉そんなに離れてるの？」

香奈が不思議そうに聞く。

え？と思いつらを見ると、いつの間にか窓際に立つていて。

一体、どんだけ高速で移動したんだよ…

「べ、別に！つていうか、ノックぐらいしなさいよな…！」

真っ赤になつて怒鳴る遙。

「何騒いでるの遙？もつ、あなたたちは来なくていい言つていつたのに…」

「ごめんねシヨウくん、この子達今天学校は創立記念日で休みなの

よ

おばさんか謝りながら入つてくる。

俺と遙は顔を見合わせ、あははと笑い出した。

予想外？

笑っている俺達を不思議そうに見ているカナサリ。

「あら、仲直りしたのね？ 良かつたわ」  
おばさんが二コ二コしながら言つ。

「で、二人はお付き合いする事になつたのかしり？」

ガタン！

遙がずつこけている。

相変わらずリアクション大魔王だな前も。

「なななななななな…！！」

真っ赤になりながら口をパクパクさせる遙。

お前…それ思いっきり肯定してると一緒だぞ。

「あら、図星？ それは良かつたわ！

ね、ショウくん」

ウインクするおばさん。

「はあ、まあ…」

他になんと答えればいいやら…

「ちょっと待つてよ！ なにそれ…！」

突然沙里が叫ぶ。

「わつ！ いきなり大声出さないでよ～？」

びっくりした香奈が文句を言つ。

「なんで！ 芳野さんの事はどうするの…？」

沙里がキッと遙を睨みながら叫ぶ。

俺達は呆気に取られていたが、まず我に返つたのはおばさんだった。

「沙里、何を言い出すの？ あなたには関係無いでしょ～？」  
少し強い口調でおばさん。

「だつて…それじゃ一股じやない！そんなの不潔よ…」

「沙里！そんな言葉どこで覚えたの！いい加減にしなさい…」

おばさんのが本氣で怒る。

「！」の間、ハル姉だつてママだつて、ショウ兄ちゃんの事忘れてたくせに！」

「あ、あたしも忘れてた…」

のほほんと言つ香奈。

「香奈は黙つて…！」叫ぶ沙里。

「ふえ…！」沙里に怒られて半泣きになる香奈。

「どうしたつて言つの、沙里…お姉ちゃんも怒るわよ…」

遙が強い調子で叱る。が、沙里は止まらなかつた。

「バカ姉！ショウ兄ちゃんの事忘れて芳野さんとイチャイチャしてたくせに…」

私はそんなの認めないんだからー。ショウ兄ちゃんの事を一番好きなのは私だもん！！

最後は涙声になつていた。

「…何ですつて…！」

おばさんが驚いている。

「沙里、あなた…」

遙も絶句してしまつた。

「なに？なんなお？」

半泣きの香奈は意味が解らざ戸惑つている。

俺は…

「沙里、あのな…」

「ショウ兄ちゃんにとつては私は妹みたいなモノなのは解つてるもん！」

だけど、昔から私はショウ兄ちゃんの事が好きだつたんだからー。ハル姉みたいに、ショウ兄ちゃんの事が好きなのに他の人と付き合つたりなんてしないもん！！」

はあはあと肩で息をしている沙里。

病室にしばらく静寂が訪れた。

「ハル姉のバカあつ……」

沙里が叫びざまに病室を飛び出す。

「あつ！沙里！待ちなさい……！」

おばさんと香奈が沙里を追つて飛び出した。

後に残つた俺と遙は気まずい空氣に包まれてしまった。

「なあ、遙、沙里の気持ちは気付かなかつたのか？」

「ええ、ショウの事を好きなのは解つてたけど、まさかあんなに本気なんて思わなかつた……」

俯いて答える遙。

「まあ、单なる憧れみたいなモノだと思つけどな」

「うん……でも、最近の小学生高学年は結構進んでるみたいだから… 私達の頃みたいに、男女でいがみ合つてるなんて事は無いし、力ナサリのクラスでも彼氏彼女みたいな付き合いしてゐる子もいるらしいし……」

う～むと唸つて黙る俺達。

「まあ、氣を揉んでも仕方無いぞ。おばさんにフォローしてもらおう」

「…そうね

遙が頷いた時、誰かがドアをノックした。

「はい、どうぞ」

俺が答えると、「ショウくん、入るね」と亜由美の声がして、亜由美を先頭に、まじかさんと俺を殴つた男性が現れた。

「ねえ、遙ちゃんのおばさんが泣いている沙里ちゃんをロビーで抱つこしてたけど、何か有つたの？」

開口一番、亜由美が不思議そうに聞いてくる。

ほつ、なんとか沙里は保護されたか…

「ああ、ちょっとね。まあ大したことじゃないから気にするなよ

俺が答える。

「ふ～ん…あ、パパ～もつとこひに来て、早くシヨウくんに謝つてよ!」「

亜由美に怒られて、中年男性が俺の傍にやってきた。  
「…あー、…昨晩は、あー、私の勘違いで、あー、済まない事をした。あー…」

…なんか、謝られてる気がしないんですけど…

「パパ！いい加減にして！全然心が籠ってないじゃない！」

亜由美が鬼の様な形相で怒る。  
と、またもノックが聞えた。

「…どうぞ」

俺の変わりに遙が答えると、ドアを開けて眼つきの鋭い男が一人入ってきた。

「あ、刑事さん…」

遙の親父さんが氣まずそつに咳く。

「どうも、南さん。いやね、被害者の少年にちやんとお詫びなさつてるか気になつたモノでね」

歳の若い方の刑事が親父さんを見ながら言つ。

「あ、キミが被害者のショウくんか。俺は担当刑事の南雲だ。こちらは上司の近藤。よろしくな」

「あ、はい、こちらこそ」

一人の刑事は親父さんに向き直つた。

「で、南さん、ちゃんとお詫びはしたんですか？」

さつき、警察署から出た時の感じじやあんまり納得デキて無さ  
そうでしたがね？」

黙つて俯いている親父さん。

「そりやまあ、半裸の愛娘を押し倒していた少年にお詫びつてのも辛いでしちうが、

「実際の所勘違いなのは解つたんだし、何よりも凶器で大怪我をせ  
てるんだからねえ」

若い刑事が親父さんに鋭い目を向けながら肩を叩く。

「ショウくん、南さんはちゃんとお詫びしてくれたかい？」

突然、近藤と言ひ年配の刑事が俺に聞いてきた。

正直、まともなお詫びをしてもらつたとは言い難いけどな…  
でも、亜由美の親父さんだし、なんとなく気持ちは解るしな…

「はい、きちんとお詫びしてもらいましたから大丈夫ですよ」  
俺の言葉に親父さんが驚いた様に顔を上げた。

「…そうちかね、なら良いんだが。

所で、今回の件で南さんを告訴する氣が有るかね？

有るのなら然るべき手続きを取らねばならんのだが「

上田遣いに俺を見ながら近藤刑事が聞いてくる。

亜由美と親父さんとまどかさんが息を呑み、はつとしている。  
「いいえ、そんな事は考えていませんので無用です」

俺がはつきりと答えると、三人がほつとした様に息を吐いた。

「…そうちかね。それでは問題無いな。じゃあ、我々はこれで失礼す  
るが、

もし何か相談とか有るようなら電話をくれたまえ」

そういうと近藤刑事は俺に名刺を渡し、南雲刑事と共に帰つていつ  
た。

## 婚約「ひつ」ー?

病室にじばりく静寂が訪れる。

「あ、そいつ言えども、俺取り調べつていつか、調書みたいなのが取られてないな」

はつと氣付き、なんとなく声に出す俺。

「え? だつて、昨晚田を覚ました時に来ていたお巡りさんと話してたじやない?」

「…そりだつけ? 全く覚えてないや…まあ、頭打つていたから仕方ないか」

ははは、と笑う俺。

ふつ、と溜息をつく遙。

「昨晩、本当に済まない事をしてしまった。

誤解からとは言え、やつてはいけない事だった。

申し訳なかつた…」

親父さんが深々と頭を下げている。

驚いていた様な顔で親父さんを見詰めていたまじかさんも、はつとしたように頭を深々と下げる。

少し驚いたが、

「ええ、気にしないでトセー。」

と答える俺。

「…ちやんと謝れるんじやない」

亞由美も驚いた様に声を出す。

「治療費や通院費なんかの必要経費はもちろんウチで持たせて貰うし、

それに、なるべくキャリの希望に沿える様に感謝料も出させて頂く

「…治療費と必要経費はありがたく頂きますが、感謝料は要りませんよ」

俺の言葉に親父さんは頭を振る。

「いや、そういうワケには行かない。

私は正直、キミの事を誤解していた。

亜由美が最近、家庭の事情から夜遊びをする様になってしまったのは

キミとの交際が原因くらいの事を考えてしまったが、それは大変失礼な思い違いだった

再び深々と頭を下げる親父さん。

「そうよーシヨウくんは眞面目で、優しくて、頑張り屋さんで、カッコいいんだから！」

私の夜遊びの原因は、そこに居るパパの新しい奥さんなのよー！」

亜由美が怒鳴る。

「亜由美ちゃん……」まどかさんが哀しそうに呟く。

「亜由美、なぜそんなにまどかを嫌うんだ。

昔はあんなに懐いていたじゃないか」

親父さんが諭すように言つ。

「何言つてるのよーママが出て行つた途端にウチに入り込んで！  
私に優しくしてくれてたのも下心が有つたからなんでしょう！…」

パンっ…！

病室に響いた音は、遙が亜由美を引っ叩いた音だった。

「は…るか…ちやん…？」

亜由美は頬を押さえながら呆然としている。

亜由美の言葉を聞きながら怒りの形相をしていた遙を見ていた俺は、やるのではないかと予想していたので驚きはしなかったが。

「バカっ…！亜由美のバカっ…！」

遥が涙を流しながら怒っている。

「あなた、昔はパパが大好きって私たちに血運してたじゃない！」

それに、娘を心配して夜中に探し回るなんて、そんな良いお父さんとまだかさんに向てこと言つの？！――」

さて、俺の出番かな。

皆が愕然としている間に俺は痛む左手と右足を庇いながらベッドを下り、

びつこを引きながらドアの近くへ移動する。

遙の勢いに押されて、遙以外は俺の行動に気付いていない。

「何よ…何よつ！－－遙ちゃんのバカあつ－－！

遙ちゃん家は良いわよねつ！－－優しくてカッコいいおじさんと綺麗なおばさん！

可愛い双子の妹ちゃんとまで居てつ！－－そんな幸せなあなたに私の辛さなんて解るわけ無いわつ！－－！」

だつと駆け出す亜由美がドアを開けよつとした時、俺は亜由美を右手で抱き止めた。

「痛つ！－－ハハ、まだやつぱ痛てえな

「シヨ、シヨウくん…？」

涙をいっぱいに溜めた瞳で俺を見上げる亜由美。

「亜由美、お前は幸せなんだぜ？お前には優しくて娘想いなお父さんと、

一生懸命お前の母さんにいろいろとしてくれているまだかさんが居るじゃないか？

それとも、まだかさんはお前の事を邪魔者扱いでもするのか？もしそななら、俺が許さない。遙だって許さない。だって、俺達は幼馴染じやないか！

昔からずっと一緒に遊んできただろ？悩みが有るなり俺達で話せ  
よ。

俺と遙は全力でお前の為に出来る事をするか？

「ショウくん…ふえ、ふえええんー…」

亜由美は俺に抱きついて泣き出した。

遙が俺にグッとサムアップしている。

俺も亜由美を右手で優しく抱き締めながら、キップスに包まれた左手を上げてサムアップを返した。

「ショウくん、遙ちゃん、ありがとう…」

親父さんが深々と頭を下げる。

まどかさんも涙を流しながらそれに倣う。

「亜由美、良い友達と彼氏を持ったね…」

親父さんが涙声で言つ。

「うとうん、と頷く俺と遙とまどかさん。

…ん…？

ピク、と遙が固まった。

「やう、最高の彼氏でしょ、ショウくんは

亜由美が涙を拭きながら言つ。

…天国のママン、絶対零度な視線が俺に突き刺さつてゐる…

「あ、あの、お父さん、それはアヌスね、誤か

「よしー解った！私はショウくんと亜由美の交際を認めるぞー！」

いや、ショウくん！ふつつかな娘だが、キミになら任せられる…。この事、婚約してしまったりビリだ！そつすれば、ショウくんは家に住んでもらえるし、

学費や生活費、進学費なんかもウチで面倒を見て上げられる…。

感極まつた様に叫ぶ親父さん。

つて、ちゅうとうひゅうひゅう…！

「ホント！？パパ！きやあ大好きーーー！」

親父さんに抱き付く亜由美。

おっせんー！テレテレしてんなよーーー！

「ちゅ…！」

遙が何かを言おうとしたながら絶句している。

そして俺をキッと睨んで口をパクパクしているが…ええいっ…！

「お父さんー亜由美ーちょっと待ってくれよーーー！」

「うんうん、もうお父さんと呼んで貰えるのか。嬉しいが寂しい、複雑な気分だな」

「もう、パパつたらあーー！」

「そうだな、まあ大学生結婚ていつのも中々ロマンチックだな。私も憧れたしなあ…」

遠い田をする親父さん。おっさん、自分に酔ってるね…？

「よしーじゃあ、二人が無事に大学受かったら入籍と挙式だな！費用はお祝いに私が全部持とう！新婚旅行はどこが良い？

あ、私とまどかもついでに旅行に着いて行こうか…」

「私オーストラリアが良いっ！でも、向こうでは別行動だからね」「ははは、若い二人の邪魔はせんよ。行きと帰り以外は別行動でな」「そんな事言って、まどかさんとの邪魔をされたくないんでしょ？」

？」

「やはは、亜由美には適わないなあ」

「をい。あんたら。むつきまでの積み木崩しチックな雰囲気はどう？」

つて言うか、あの、その、お話を聞いて下されると嬉しいんですが：

「だーかーらー！なんでそうなるんですか！」

「おお、ショウくん済まない、君の意見を聞いてなかつたな

…ほつ。我に返つてくれたか。

「で、ドコが良い？オーストラリアじゃ不満なら、ヨーロッパでもカナダでも…」

…をいつ…親父つ…そつちかいつ…

「あなた、亜由美ちゃん、ちょっと待つて。ショウくんと遥ちゃんが戸惑つてるわ。

大体、飛びすぎよ一人とも。もうちょっと落ち着いて」

まどかさんが冷静に突つ込みを入れてくれる。

「あ、ああ。そうだな。ちょっと先走りすぎたか。

まあでも、ショウくん、今の話は飛び過ぎとしても婚約の話は考えてくれたまえ

「…えーと、その、あの」

言い淀む俺。

「とりあえず、今はショウくんの怪我の完治が最優先です。

後の話はそれからじっくりしましょ？」

まどかさんが俺と遙に田配せをする。

この人、かなりデキそうな女性だな。

「あらあ？何が有ったの？」

遥のおばさんが眠った沙里を抱いて戻ってきた。  
香奈もひょこひょことくつ付いて来てる。

「あ、これは若宮さん、この度は大変迷惑をお掛けしまして…」

亜由美の親父さんがおばさんに挨拶する。

「ね、ショウくん！明日何か作ってくるね！何が良い？」

亜由美が俺の腰に手を廻して抱きついてくる。

遥からの視線がメチャ痛てえよ…

「あ、ああ。じゃあ肉じゃがなんか良いかな？」  
適当に答える俺。

「そ、亜由美、今日は帰ろうつか。

シコウくん、また来させてもらいつよ。やつその話、考えておいて  
くれ

親父さんが俺の肩をポンポンと叩いて病室を出て行き、まじかさんがそれに続く。

「ショウくん、また明日ね！大好きだよ」

亜由美が突然俺の頬にキスをしながら言い、タタタと掛けて出て行  
つた。

立ち尽くす俺の後ろで、真っ赤に燃えている炎の様な存在感が居る…  
ギギイッ、つと自分の首から音がしてくるような気さえしながら振  
り向くと、

可愛い顔を般若の様に歪めた遥が立っていた。

神よ……もじ居るのなうこの状況をなんとか收拾してくれたまえ…

熱々？

「ショウくん、退院おめでとうー。」

「無理しちゃダメよ。まあ、可愛くて世話好きな彼女が居るから大丈夫かー。」

にこやかな看護婦さん達に見送られ、俺は一週間の入院生活にペリオドを打つた。

「ショウくん、今日はお祝いしようねー。まどかさんが用意してくれてるのー。」

まだちよつと痛い右足を引き摺る俺を支えているのは…

長かつた髪をバッサリと肩までの長さに切ってしまった亜由美だ。俺の世話をするのに邪魔だとかで、惜しげもなく切ってしまったそうだ。

その行為に涙を枯らすほど泣き濡れた男共<sup>ヤロウ</sup>が一ダースは居たとか…そして、その俺達をぶすぐれた顔で追うのは遙ちゃん…ものすげえ冷たい視線が俺と亜由美に突き刺さっている…つて、何度目だこの背筋の冷たさは。

くるりと振り返った亜由美が、

「遙ちゃんも絶対来てねー。香奈ちゃんと沙里ちゃんもねー！」と遙に笑い掛ける。

「え、ええ、ありががとうー。」

無理に微笑みながら答える遙。だが噛んでるぞ…

…すまん、我が恋人よ…

しかし、現在<sup>いま</sup>の亜由美の精神状態を考えると、突然

「実は俺、遙とラヴ。してるからお前とはラヴ。出来ないんだ。テ

ヘツ」

なんて言おつモノなりどくなつちまうか解らないしなあ…

その事自体は遙自身も理解していて、彼女自身も

「亜由美には私たちの事はしばらく内緒にしてね」と言つてるか

ら問題は無いハズだが、

そういう事情が有つたとしても自分の彼氏が田の前で他の娘とイチャイチャしてるのを

二口一口しながら見てるのは無理だろつな。常識的に考えて…

だが、退院すればバイトで忙しい俺の所へ

亜由美もそろそろ遊びに来る訳には行かないし、

亜由美の家から俺の部屋までは結構距離有るしな。

そうしたら、思つ存分遙とイチャ×ラヴ出来るつてもんさー…ああ…

そうだとモー！

しかし、そんな俺の田論見が外れまくるのはお約束なんぢゃないのか…？

いかん、ついマイナス思考に陥る癖が付いたまつてゐる。

ポジティイヴシンキングで行こうぜ！俺よ。

病院の外に出ると、亜由美の親父さんが車で待つていた。

「やあ、ショウくん、退院おめでとうーさあ、乗つて乗つて…」

助手席からまどかさんが降りてきて荷物をトランクに入れてくれる。

「うおっ！BMW…」

こんな高級車に乗るのは初めてだ。

俺んちで買った一番高価かつた車は最後に乗つてたハイエースワゴンだったしな。

それまでは軽のハコバン専門だったし。

遙の家もセドリックだし…

亜由美の親父さんは某一流企業重役だからな…

「さ、みんな乗つて！とりあえずショウくんの部屋に行こつか。

遥ちゃんのご家族は今日のお祝いに来てくれられるんだよね？」

親父さんが遙に聞いてくる。

「あ、はい、父は仕事なので無理ですが、私と妹達はお邪魔します」

「あー、お母さんは？」

まどかさんが聞く。

「あ、母は父の食事の支度とかが有るのでご遠慮させて頂くそいつです」

「まあ、残念ね。でも、今日は私と亜由美ちゃんと腕によりを掛けたから期待してね」

「…はい、ありがとうございます」

う～む、無理してんな、遙。

後でイイコイイコしてあげよう。

そつこひする内に俺の部屋へと到着する。

一週間ぶりの我が部屋、なんか物凄く久しづびりな気がするなあ…

亜由美に待っているように言い、カナサリを呼びに行く遙と一人で車を降りる。

「あ、遙ーお前に借りてたCD返すからちょっと来ててくれよ」

俺は亜由美にも聞こえる様に大声で言い、遙と部屋に入った。

すると、結構散らかっていた部屋の中がすっきりと片付いていた。

「掃除、しといたから…」遙がぼそっと呟く。

俺は突然振り向き、遙を抱き締めた。

「あん！もうバカ…」

アヒル口で文句を言いながらも俺の首に腕を回す遙。

俺達はぎゅっと抱き締め合つた。

遙の胸が俺の胸に押し付けられて柔らかい感触が広がる。遙が潤んだ瞳で俺を見詰めていたが、すっと瞳を閉じて可愛らしいアヒル口を少し突き出した。

俺は自分の唇を遙のそれにそつと重ねた。

「ん…」

遥が軽く喘ぐ。

一度唇を離し、角度を変えて重ねる。

「あん…」

可愛い遥の喘ぎ声に、さつきから大きくなっている俺の一部が更に反応する。

しかし、遥はそっと俺の胸に手を当てて唇を離してしまった。

「あんまり長く掛かると、不自然でしょ…」

潤んだ瞳で俺を見詰める遥。

俺達はもう一度、ちゅっと軽くキスをした。

「ショウ、大好き…もうどうしようかわかない位大好き…」

遥がぎゅううと抱きつこいくる。

「俺もだよ、遥。もう絶対離さないからな」

言いながらぎゅうと抱き締める。

「ずっと、こうしてたいよ…」

遥が涙ぐんでいる。

「今夜、亜由美の家から帰ってきたらちょっと寄つてくれよ」

俺の声に遥が首を振る。

「え？ 嫌なのか？」

焦る俺。なんか、下心でもある様に見えたのか…？

「んーん、ちょっとじゃイヤ。ゆっくりしてくもん」

遙が悪戯っぽく笑う。

泣いたり笑つたり忙しい娘だな、お前も。

そして、俺達はせーの、と声を掛けてバツと離れた。適当なCDを遙に渡して、

「じゃあ、カナサリ呼んで来いよ」と声を掛ける。

「ん、ちょっと行ってくるね…」

元気に声を上げて遙が部屋を飛び出していく。

… 今夜か。ううん理性が持つかな…



告白…

さて、まどかさんと亜由美の料理はとても美味しいく、懸念していた遙の機嫌と沙里の状態もまあ問題無かった。

で、現在。

俺の目の前で裸の胸を隠して泣きながら真っ赤になってしまっている遙がいる…

もちろん！

それ自体は怪我はすれども健全な男子高校生として、幼馴染にして最愛の彼女が自分の目の前であられもない姿をさらしている事は

歓迎こそすれ嫌がる理由など無い」にも無い。

ただし、そこに血を吐く様な告白を伴つてしまっているのでは…

「ぐすり、ねえ、ショウ…私みたいな女の子、嫌いになつた…？」

遙が泣きながら擦れた声で叫ぶ。

「そ、そんな事ないさ！…どんな事をしても、遙は遙だよ。

嫌いになんてなるわけ無いじゃないか！」

「嘘つ……じゃあなんで、抱きしめてくれないのつー…」

くつ…！

俺がもう少し早く自分の気持ちに気付いていれば…

くそつ…動け！俺の体！俺の腕！

俺の一番大切な人を抱きしめろ！

「うおらあつ…」

俺は叫び様、遙をぎゅうっと抱き締めた。

「…シヨウ…」

俺の腕の中の遙が呟く。

「大丈夫だよ、俺はぜんぜん気にしてない。」

お前はその時、確かに芳野先輩の事を好きだつたんだろ？  
だつたら、そういう事が有つても当然だよ。

これから、俺たちはずっと仲良くなつてくれんだろ。

何も、問題なんかないさ」

「シヨウ…ありがと…」

遙が俺をぎゅっと抱き締める。

これから俺が、遙を守つて行かなきやな…

「ね、シヨウ…」

遙が目を瞑り、口を少し突き出す。

俺はそつと唇を重ねた。

俺の脳裏には、今夜の出来事が甦つて来た…

「遠慮せずに食べてね！」

ジューースで乾杯した後、亜由美とまどかさんの料理を頂く俺たち。  
豪華で本格的な料理はヘタなレストランなど足元にも及ばないほど  
美味く、

俺も遙も力ナサリも夢中になつて食べてしまった。

食後、みんなでゲームなどして楽しい時間を過ごします。

午後九時を廻り、力ナサリが眠くなつてきてそのまま帰らなきやとい  
う時の事だ。

うとうとしている力ナサリをソファに寝かし、俺と遙と亜由美の二人  
になつた時、

「ねえ、遙ちゃん、芳野先輩とはどこまで行つてるの？」

無邪気な亜由美的質問に遙の動きが止まった。

「え！…そんな、別に何もしてないよ…」

遙の動搖ぶりが、何もしてないなんて事がない事を雄弁に語る。

「またまた！だつて校内N.O.・1カップルの名は伊達じやないでしょ？」

ちょっと前、体育準備室でキスしてたつて噂になつたじゃない！」  
その噂は俺も知つてゐる。

ただ、本人たちが否定も肯定もせずに騒がなかつたので沈静化した  
が。

「あ、あれは…!…」

絶句している遙。あれは、本当だつたんだな…

チラチラと俺を見る遙。

「ねーねー、教えてよー！遙ちゃんの体験を聞けば、  
オクテなショウくんでも少しほははつ…」

赤くなつた顔を両手で押さえ、ふるふると振る亜由美。

「そろそろ、カナサリを寝かさなきゃダメだな。帰ろうか、遙」  
俺が立ち上がる。

「あん、もう少し良いじやない！」

亜由美が不満げに口を尖らす。

「俺達は良くても、遙のおじさんとおばさんが心配するだろ？  
また、近い内にみんなでゆつくり遊ぼうぜ。」

俺も病み上がりだから無理出来ないしな」

「…そうね、じゃあ、パパ呼んで来る」

亜由美がパタパタと掛けて行く。  
俺は、俯いたままの遙に声を掛けた。

「まあ、気にするなよ。俺はそんなの気にしてないし」

「…ホント？」

遙が顔を上げる。

「あ！涙ぐんでるじやないか…！」

「あ、ああ！ホントや。そりや全く氣にならないって言えば嘘にな

るナビな

「…やつぱ、気になるんじゃない…」

また俯いてしまつ遙。へやつー・ビツすりや良こんだよ…

その後、俺達は亜由美とまどかさんに見送られながら親父さんの車で遙の家まで送つてもらつた。

俺と遙で寝てしまつたカナサリを抱いて遙の家に入る。カナサリをベッドに寝かせて俺が帰ろうとするとき、遙が一緒に行くと言つ出した。

もう遅いから、とう俺におばさんが

「良ければ連れてつて上げて。今日はショウヘンのトコ泊まって来なさいな」

と、とんでも無い事を言つ。

俺が焦つていると、「…ありがとう、ママ」と遙が答える。

俺がおばさんの顔を見ると、少し寂しげな表情でワインクをしてくられた。

二人で夜道を歩いていると、遙が俺の手に腕を廻して来る。俺は遙の手を握り、ぴつたりとくつ付く様に寄り添つた。部屋に入り電気を付ける。

「ねえ、お風呂借りても良い…？」

遙が言い出す。着替えはおばさんが持たせている。

「あ、ああ。今焚くから」

俺のアパートにはシャワーなんて言つ洒落た物は付いていないのでガスを焚きつけて沸かさなければならぬ。

ガスを焚き付けて、部屋に戻つたら遙が涙をぽろりと零していた。

「遙…」

俺が声を掛けるとビクッと遙が震える。

少しの間、風呂を焚くガスの音だけが響いていた。

「ねえ、ショウ…私ね、博隆と付き合つてゐる時…」  
そこまで言つと遙は声を上げて泣き出した。

「えつ、えつ、えつ…ふえ、えへん…」

何だ！どうしたんだよ遙！

声を掛けて抱き締めたいのに、俺は動く事が出来ない。

「わたくし、私は、えつ、ダメ、つて、ふえつ、言つたんだけど、ひく

つ…」

遙は顔中ぐしゃぐしゃになしながら畠田を始めた。

**愛してるーー！**

遥は泣きじやくりながら告白を続けた。

「わた、私、ひっく、まだ、早い、うえ、つて、思つて、ひっく…」

先月末の事。

遙と芳野先輩はある映画のレイトショーを見に行つた。  
もちろん、両方の親の許可は取つて、だ。

しかし、芳野先輩の勘違いでその日は観たい映画の公開一日前で、  
観たくもない映画をお金出して見るのも何なので映画鑑賞は取り止  
めに。

これからどうしようか相談しながら公園を歩いている内に良い雰囲  
気となり、

ベンチに座つてキスしたりイチャイチャしているとチンピラっぽい  
五人組に絡まれ、

芳野先輩と遙で一人ずつぶつ飛ばしてその隙に逃げ出した。  
追いかけてくるチンピラから逃げている内に、ラブホ街に迷い込み、  
隠れるのと一休みする為に一軒のラブホに入つてしまつた。  
そして、その後の事は…

「うえつ、『めんね、ごめんねショウ、ひっく、あたし、ひっく、  
博隆に、えつ、ふえ、えーーーーーん…』」「

遙がペタンと床に座り込み、顔も隠さず大声を上げて泣き出した。  
その時の俺は呆然としてしまい、泣きじやくる遙をほけつと見てい  
た。

キスくらいは当然だと思っていた。  
もしかすると、遙の魅力的な体は触れられているかもしれないとも  
思った。

しかし、おやか…！

その時、風呂のタイマーがカチッと止まった。

「遙、風呂沸いたぞ…」

なぜか俺の口からそんな言葉が出てしまった。

ピクッと震える遙

「ねえ、ひっく、ショウ、…ひっく、こんなあたし、ひっく嫌いになつた…？」

そんな事ない！遙はおまえだ！関係ないよ！  
おまえ

口をパクパクさせる俺。

しかし、肝心の言葉が出て「ねえよつ…！」

くそつ…！…どうした俺…！！

今こそ、俺の今までの生涯で一番大切な娘を抱き絞めろ…！

…しかし、俺の腕も、足も、口も……

なんで動かないんだ…どうしちまつたんだよ俺…！

お前はその程度の男か…！

大好きな娘がばっくりと割れた傷を隠さずに見せてくれたのに、  
その傷に怯んで動けなくなつまう程度の小せえクズなのか…！

「やつぱつ、ひっく、許してくれないんだね…ふえ、うえへん…」

また泣きじりくり始める遙。

ちくしょーどして動けないんだ！何で声が出ないんだ…！

ドンーガシャーーン…！

「うわ…！」

「さやつ！？」

突然、隣の物置部屋から凄い物音がして俺と遙は飛び上がるほど驚いた。

「な、なんだ！？誰か居るのか！？遙、お前はここにいる！」  
俺は叫ぶと隣の部屋に向かつてダッシュする。  
物置のドアを開け、電気を付けると…－

「あつ…！」

銀色の巨体が斜めになり、積んであつた荷物を薙ぎ倒している。  
そこには、スタンドが外れて倒れかけた親父の形見カタナが有つた。

「親父…」

力タナのヘッドライトが俺を睨んでいる様に見える。

俺は力タナを起こし、スタンドを掛ける。

その時、親父の怒鳴り声が聴こえた気がした。

「ショウ！男の仕事はな、大好きな女の子を護る事だ！お前は遙が  
好きなんだろ？」

「だったら、どんな事が有つても遙を護れ！解つたな…！」

小学生の頃、親父が俺に言つた言葉。

今こそ、その時だ！

ありがとう、親父！

俺は力タナに向かつてバツと頭を下げ、部屋に戻つた。

「遙！」

俺が部屋に駆け込むと、遙が上半身裸で立つてゐる。

「わつ！？どうした！遙！？」

思つたよりもずっと大きな遙の胸に手を引き付けられて戸惑つ俺。

「…シヨウよりも先に、触られたの。シヨウよりも先に…」

遙が胸を両手で覆い隠す。

「ねえ、シヨウー私を抱き締めてーもし、もつ汚れちゃってる私で良ければ…」

抱き締めてーお願ひーシヨウーー」

溢れ出る涙を隠さうともせずに遙が叫ぶ。

そつだ、あの涙を止めなきゃー！

動け！俺の体！俺の腕！！

親父に叱られたばかりじゃないか…！」

「つむりあつ…」

俺は叫び様、遙をぎゅうっと抱き締めた。

「…シヨウ…」

俺の腕の中の遙が呟く。

「大丈夫だよ、俺はぜんぜん気にしてない。

お前はその時、確かに芳野先輩の事を好きだったんだろ？

だったら、そういう事が有つても当然だよ。

これから、俺たちはばずつと仲良くやつてくんだろ。

何も、問題なんかないぞ

「シヨウ…ありがと…」

遙が俺をぎゅうと抱き締める。

これから俺が、遙を守つて行かなきゃな…

「ね、シヨウ…」

遙が目を瞑り、口を少し突き出す。

俺はそつと唇を重ねた。

「ん…」

愛らしき喘息を声を上げながら、遙は俺の腰に廻し手にわきつと力を込めた。

俺は遙の柔らかい唇の感触を惜しみながらキスを終らせ、もう一度遙をぎゅっと抱き締める。

「遙、お前は汚れてなんかないよ。こんなに綺麗じゃないか。

俺はお前が大好きだ、愛してるんだ。

だから、もう一度とそんな悲しい顔をしないでくれ」

遙はぐすぐすと泣いていたが、その涙はもう悲しみの涙じや無くなつていて。

「ショウ…私ね、ホントは君、ショウのお嫁さんになるのが夢だったの。

でも、成長する内に、いつの間にか忘れちゃってた…

でも、でも、またその夢が戻つてきちゃつたよう…」

涙で光る瞳を上田遣いにして、じつと俺を見詰める、俺の最愛の少女。

「つて、お、お嫁さん！？」

……ああ、こいだろ！俺だって、君は遙をお嫁さんにあるつて思つてたんだしな。

よし、それなら…

「じゃあ遙、今すぐ、じゃないけど、将来俺がお前を養えるよつになつたら結婚してくれるか？」

バツと遙が顔を上げ、大きくてぐるぐる動く瞳が驚いた様に俺を見つめている。

そしてアヒル口がにゅうん、と丸まつ、「ぱつー」としたいつもの笑顔が戻ってきた。

「……仕方ないわねーショウがそんなにあたしの事が大好きなら、

大サービスでお嫁さんになつてあげるわよ！・」

ハア？

「つてをい！お前なあ！なんだそりやーーー！」

「バカショウ！あたしに感謝しなさいよね！」

あたし以外に本気であなたを好きになる子なんてしなかったから  
「！」

向脇を朋にあて、心から運んでいた。だから俺子に向いて言い放つ。運  
俺はふう、と肩を落としながら溜息をついた。

「シミウ、何笑ってんのよ! さあお風呂入るわよ! 支度しなさいよ」

一緒に入るのか?」

「そ、そうよ！しつかり私を洗つてよね！今夜は、思れで聞いだ俺の言葉は遙はな、一と示くなかが

ショウと私の、初めての夜なんだからー！」

といふいふと皿を逸らしながら頬を紅潮させた

そうか、もうだよな。

「ようし、じゃあ気合入れて入ろうかー俺の可愛い遙ちゃん」

「もう、バカ！さつさとしなさいよ！」

私の世界で一番大好きで大切なショウ

さて、そんなこんなで一段落。  
まだまだ頭痛のタネは多いけど、なんとかかんとかやつて行こうか  
ね。

そう、俺と遙の一人でな。

さあ、明日も頑張るぞー！ー

それすらもただ平穏なる日々

完

## 愛してやー！（後書き）

Ending image song : 硝子のキッス

Artist : Rika Himenogi

Special thanks to Naoki · M & ;  
Haruka · I & ; Sanae · O  
And Very Thanks To All .

Presented by Shogo Hazawa

「それすらもただ平穏なる日々」

『愛読頂きましてありがとうございました！』

まだまだショウと遙のドタバタカッフルの物語は続きますが、一先  
ず区切りとさせて頂きます。

長らくの『愛読、真にありがとうございました！』

また、多くの評価と感想を頂きまして、こちらも本当にありがとうございました！

『愛してやー！』

また、現在続編「それすらもまた、平穏なる日々」を連載しております。

こちひも併せてお読み頂ければ幸いです。

それでは、またお会いできる事を楽しみに…

作者より、全ての読者様に親愛の情と感謝の念を込めて…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7165c/>

---

それすらもただ平穏なる日々

2010年10月10日22時23分発行